

地域と農業

会報

第 68 号

Jan. 2008

Winter

特集

平成19年度 北海道地域農業研究所自主研究

「北海道農業の課題とその発展方向」に

係る第二一回研究会報告

札幌でのご宿泊なら
いつも安心・快適な

ホテルノースイン札幌
北農健保会館へ

1 冬割ツイン・和室プラン **素泊り**

一室2名以上のご利用で

お一人様 **¥2,500~**

2 Sルームプラン **限定10室**

バス・トイレ付のシングルルームでの
お泊まり 朝食付きのお得なプラン

¥5,000~

3 団体宿泊プラン **ツイン・和室限定、料金一括払い**

同一日に**10名以上**で宿泊すると冬季基本料金の**10%OFF**(2,300円~)、
さらに会議室を利用すると会議室料金を**30%OFF**

- ・ほかの割引制度との併用は不可。
- ・**団体宿泊プラン**はツイン・和室を同一日に一室2名以上でご利用し、合計10名以上の宿泊に適用。
- ・団体宿泊プランは宿泊ポイントの対象にはなりません。

期間 平成19年11月1日~20年5月31日

ホテルノースイン札幌
北農健保会館

〒060-0004 札幌市中央区北4条西7丁目

電話ご予約 011-261-3270 FAX 011-261-3298

<http://www.hokunoukenpo.or.jp/kaikan/>

FC e-Front runners

農産物の品質を支える
新しい「営農支援」。
富士電機の提案です。

モバイル端末を活用するなど、
新しい情報システムが農産物の品質を支えます。

- モバイル病害虫防除支援システム
- 圃場巡回情報管理システム
- 生産者管理台帳
- 圃場管理システム
- 栽培履歴管理システム
- トレーサビリティシステム
- 農地地図情報システム
- 選別施設情報システム

富士電機の営農支援システム

モバイル病害虫防除支援システム
JA長野県営農センター様と共同開発
7月から運用中!

地域と農業

Vol .68

表紙写真：斜里町
提供：山田 精一



目次

2

みる
観察

穀物の争奪戦が始まった

(社) 北海道地域農業研究所 専務理事 矢野 実

5

特集

平成19年度 北海道地域農業研究所自主研究
「北海道農業の課題とその発展方向」に係る第2回研究会
報告 「農協改革の方向と北海道における農協の役割」
東京農業大学 国際食料情報学部 教授 白石 正彦

36

Essay

農業に魅せられて その4

養鶏農家 (東川町) 新田みゆき

41

レポート

「手習い」イギリス文化論 第10回
～イスラム体験～

北海道大学創成科学共同研究機構
明治乳業「乳の価値創造研究」寄附研究部門
博士研究員 小林 国之

54

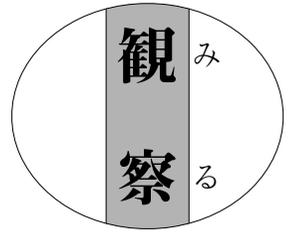
連載No.51

あのマチこのムラ地域おこし活躍中
八雲町の事例

(社) 北海道地域農業研究所 特別研究員 斉藤 勝雄

59

お知らせ・掲示板・DATA FILE



穀物の争奪戦が始まった

(社) 北海道地域農業研究所 専務理事 矢野 実

年が明けて早々、原油(WTI) 価格が初めて一〇〇ドルノバールを越え史上最高値を記録したことが伝えられた。昨年来上昇を続けていた原油価格は高値に張り付いたまま一向に下がる気配を見せていない。一方穀物価格も非常に高値に見舞われており、飼料価格の高騰はわが国の酪農・畜産業に大きな打撃を与えている。

国際穀物フォーラム

昨年十二月に農林水産省・外務省・国際穀物理事会が主催する「国際穀物フォーラム」が東京で開かれ、参加する機会を得た。「食料供給は逼迫する需要に追いつくか」というテーマで基調講

演とパネルディスカッションが行われたが、穀物価格高騰の背景や今後の需給見通しについて、アメリカ・中国・日本の研究者・専門家の見解を聞くことができた。

最近の需給逼迫状況は穀物危機といわれた七〇年代はじめに似た深刻な状況にあり、在庫率は危険水準にあることが報告された。その要因として、中国やインドなどアジアを中心とした人口三〇億人地域の人口増や経済発展が背景にあること、全世界の耕地面積が減少傾向にありかつ単収の伸び率がスローダウンしていること、気候変動(干ばつ)や地下水枯渇により主産地での生産量が伸び悩んでいること、さらに加えて、バイオ燃料原料としての新たな穀物需要が大幅に増えてきていることなどがあげられた。

ブッシュ大統領が二〇〇七年一月の一般教書演説の中で二〇一

七年までに年間三五〇億ガロンのバイオ燃料使用を目標とすると発表したことをつけて、アメリカ国内ではバイオエタノールの生産が一気に加速しており、このため原料トウモロコシ需要が急増するとともに小麦や大豆の作付にも影響を与えているという。

バイオ燃料向け需要は、地球温暖化対策や原油情勢を背景に当面世界的に増え続けるとの見通しから、穀物をめぐって国家間や市場（エネルギーと食料）間の争奪戦がすでに始まっていること、また原油価格の高騰がさがけとなつて安くて潤沢な地球資源の時代は終わりを告げ、食料もその例外ではないとの見解が示された。したがつてこのたびの価格高騰は一過性のことではなく、大豆・小麦・トウモロコシなど主要穀物相場はこれまでの価格帯より一段高い、新たなゾーンに入るだろうという。

パネルディスカッションでは、需給問題の打開方策についてパネルからそれぞれ意見が述べられたが、穀物をめぐる各国の立脚点の相違がはっきりと表れた。アメリカは、穀物の自由な貿易とバイテク（遺伝子組換え）技術の徹底した活用が需給逼迫の解消に不可欠であるとし、求められれば食料・飼料・エネルギーいずれの穀物需要にも応える用意があるとの見解を示した。中国は、自国の食料需要の増大が世界的な懸念材料と見られているなかにあつて、今後ともこれまで同様国内需給がバランスするよう、食糧の安全保障を最優先とした政策を徹底する考えを示した。一方

わが国は、狭い国土にあつて自給には限界があることから、輸入国として穀物の安定確保を図るとともに、国際的な食料安全保障強化のため開発途上国への農業分野での支援に取り組むとした。

不測時の食料安全保障はイモ頼み？

また同じ頃、道内の経済団体が主催する食料の安全保障と備蓄に関するセミナーに参加した。

講師から、穀物は中国（自給率一〇一％）やインド（同九一％）がほぼ自給できているのに、日本では三〇％に満たない自給率に留まっているなど、日本のきわめて低い食料自給率の実態が報告され、その原因として、多様で安価な食料を求める消費者のニーズに国内の生産者が対応しきれていないことなどが挙げられたが、受講者から「中国・インドに較べてずっと人口の少ない日本があまりにも低い自給率であるのはいかがなものか、消費者のわがままな意向を放置しないで国として自給率アップを誘導すべきでないか」との発言があつた。

またわが国の不測時の食料安全保障について、海外からの輸入が途絶え国民一人あたりの供給カロリーが二、〇〇〇_キカロリーを下回る事態となつた場合には、緊急措置として野菜作等をイモ類に生産転換して、国内農業生産の熱量効率を上げる（日常の食

事はイモが中心になる)ことや、食料備蓄制度として米で一・四か月分(一〇〇万トン)、小麦二・三ヶ月分、大豆二週間分、飼料穀物一か月分確保していることが説明された。これに対しても、受講者から「コメが全く取れなかったときのことを考えたら、一〇〇万トン備蓄では足りないのでは、一年分の需要を満たす備蓄をすべきでないか」との意見が出された。

おそらくこのような話題にあまり接したことのない受講者がわが国の食料事情を目の当たりにした結果、つい口をついて出てきた意見ではなかったかと思われる。

これまで行政などが実施している世論調査で、日本の食料自給率が四〇% (カロリーベース) に過ぎないことを知らなかったとの回答が六五% に昇るという結果が出ている。食べ物があり余るほどあふれているわが国では、自給率に対する人々の関心が高まり高くないためだろうが、それでいて70%の回答者は日本の自給率は低すぎると答えている。

資源枯渇時代に取り組むべき課題

農水省は、穀物の国際競争戦が激しくなってきたことから小麦・大豆・飼料など輸入依存度の高い穀物の備蓄拡大の検討に入っている、との報道が先ごろあった。わが国の食料安全保障に

向けた当然の緊急対応といえる。しかし反面、日本の備蓄拡大が世界的な穀物競争戦に拍車をかけることになりはしないか懸念される場所である。「国際穀物フォーラム」では、温暖化をはじめとする環境問題や途上国を中心とした人口増加問題を抱えたこの地球にあつて、逼迫するエネルギー・食料需給の緩和策をいかに速やかに開発し資源枯渇時代を克服していくかが喫緊の重要課題だとの認識が示された。この認識に従えば、世界一の穀物輸入国であり、かつフードマイレージ世界一の国として食料確保のために莫大なエネルギーを費やし、しかも輸入相手国から貴重な水資源をも奪っているという批判にさらされかねないわが国が取り組むべき課題はより重要かつ深刻だ。

エネルギー同様、ますます商業ベースでグローバルに取引されるようになってきている食料(穀物)を、経済力に陰りが見えてきたわが国がこれまでのように好きだけ買えることになるのか保証の限りではない。食料自給率目標数値を掲げながら、なお数値の低下を招いているわが国だが、イモばかりの食事(これとて生産や流通に必要な燃料が確保されてはじめて手に入るもの)の日々などという悪い夢だけは見たくないものだ。

平成19年度北海道地域農業研究所自主研究

北海道農業の課題とその発展方向」に係る第二回研究会

(平成十九年十二月十九日開催)

座長挨拶

(社)北海道地域農業研究所 所長 太田原 高昭

昨今、いろいろな場面において戦後最大の転換期と言われているけれども、北海道から見ると違和感を感じることがなにもあらずです。皆さん、それぞれ異なった立場でお仕事をされていますが、この点について異論はないでしょう。前回、農地問題について議論した時も、このような感想を持ちました。

今回のテーマは農協問題です。昔から農協については「改革！改革！」と言われ続けてきました。「改革か？解体か？」なんて言われたこともあります。住専問題がクローズアップされた時は信用事業改革が、また様々な不祥事が発覚した時は経済事業改革が問われ、

その時々によって重点は変わってきましたけれども、農協の改革は今日に至るまで行われてきたわけです。

もちろん北海道の農協も改革を進めてきたのですが、全国の動きとはちょっと異なっています。これまでの動向を振り返ってみても、北農五連のほとんどが全国連に統合していませんし、農協合併についても、遅れていると言うと語弊がありますがテンボが緩やかです。このように全国とは異なった動向が確認できるのですが、では農業専業地帯である北海道は、やはり全国が目指す方向と一致していません。この点について確かめてみる必要があると思いま

す。

ただ、このことについて考えるには、我々の頭だけでは限界があります。そこで、今日は全国の農協の実態に詳しい東京農業大学の白石先生をお招きしました。白石先生については、日本農業新聞の

連載記事で皆さんもよくご存じのことと思います。一貫して農協と共に歩んで来られた数少ない農協の専門家です。今日は全国の農協の動向をしつかりと勉強して、北海道の農協が向かうべき方向を見いだすことができればと考えています。よろしくお願いいたします。

報告 「農協改革の方向と北海道における農協の役割」

東京農業大学 国際食料情報学部 教授 白石正彦

今、過分な紹介をいただきました東京農大の白石です。私は必ずしも北海道の状況を良く知っているわけではないのですが、北海道には毎年来ております。東京農大の学生実習で一九七一年以来、ほぼ年に一回、真狩村へ行っています。その関係で真狩の農家の皆さんや、よつてい農協の皆さんとお付き合いしています。それと、昨年はJANAネットワーク十勝の欧州農協調査団の顧問として十勝地域の農協の皆さんとおよそ十日間、ヨーロッパへ通訳も兼ね視察に行っていました。ドイツ、デンマーク、フランスなどを一緒に

巡ったのですが、以来、その方々が東京へ来られると一緒に食事しています。先月もお会いしました。そんなことで、私も北海道のことを勉強させていただいているのですが、先日、太田原先生より「農協改革の方向と北海道における農協の役割」というテーマで報告して欲しいという依頼があった時、果たして北海道の農協が果たす役割について十分に話すことができるかなと感じてしまいました。自信はありませんけれども、一応、準備してまいりましたので、報告させていただきますと思います。

白石 正彦(いらいし まさひこ)氏



1942年 山口県生まれ
九州大学大学院修了、農学博士
1978～1979年 英国・オックスフォード大学農業経済研究所
客員研究員
1993～1995年 国際協同組合同盟(ICA)新協同組合原則・
宣言検討委員
1993年～現在 (独法)国際協力機構青年海外協力隊技術専
門委員
1998年 ドイツ・マールブルク大学経済学部客員教授
1998～2007年 農林水産省「農林水産祭中央審査委員会」委
員
1999～2001年 日本協同組合学会会長
1999年～現在 家の光協会「家の光文化賞」審査委員
2003年～現在 全国農協中央会「JA経営マスターコース」
コーディネーター
2003年～現在 (財)日本特産農産物協会理事
2004年～現在 全国森林組合連合会「森林組合監査士試験委
員」

【主な著書】

『協同組合の国際化と地域化』(監修著)筑波書房、1992年
『新原則時代の協同組合』(監修著)家の光協会、1996年
『食料環境経済学入門』(編著)筑波書房、1998年
『フードシステムと政策の役割』(編著)農林統計協会、2003年
『農と食の現段階と展望』(編著)東京農業大学出版会、2004年

1. 北海道農業と農協の位置づけ

皆さんご存じのことでしょうが、全国の耕地面積の四分の一を北海道が占めています。農家数はそんなに多くなく二・一%を占める程度ですが、農業産出額は一・一兆円で十二・六%、カロリーペー
スで見ると二二・四%も占めています。経営規模も個々のバラツキ
はありますが、一戸当たり平均一九・八haとかなり大きいです。都
府県の一・三haと比べると全然規模が違います。正にEUなみの規
模を持っている地域と言えます。一戸当たり飼養頭数も、乳牛が九
九・七頭、肉牛が一五五・七頭と大規模です。農家一戸当たり農業
粗生産額は一、六六一万円、農業所得は五一五万円です。都府県は
それぞれ三三八万円、一〇三万円ですから、これらも規模が違いま
す。要するに北海道は農業依存度が高い地域なんです。北海道の農
家一戸当たり農業依存度は八七・一%ですから、都府県の三一・四
%よりも五〇ポイント以上も高いんです。もちろん、こうした経営
規模は大量の離農の発生によって実現したんだということも忘れて
はならないでしょう。

それから全製造業に占める食品製造業の出荷額シェアですが、北
海道は三三・六%になるんです。製造業の三分の一が食品関係とな

ります。北海道の農業とその関連産業がいかに密接であるか、おわかりいただけると思います。しかし、オーストラリアとのEPA締結が実現した場合、どれだけ北海道の経済が打撃を受けるのかといった分析が、昨年なされました。このようなことが背景にあるので、こうした分析が注目されたのではないのでしょうか。いずれにしても日本の農業を引っ張っている地域は北海道なんです。ですから北海道の農業が打撃を受ければ、日本の食料自給率は下がります。北海道は非常に大きな役割を担っている地域なんです。

農協に関して述べておきましょう。現在、総合農協は道内に一一八あります。全国は八一〇ですからかなり多いと言えます。先ほど太田原先生からもお話がありましたように、合併はあまり進んでいないとは言えません。しかし、九州も総合農協が一〇〇以上あるんですね。北海道同様、一つの大きな島を中心とした地域に一〇〇以上の農協があるんです。そう見ると九州だって合併が進んでいないじゃないかということになるのですが、私は合併が進んだのかどうかということよりも、農協の実態がどうなのかということの方が問題だと思っています。問題は中身ですよ。

正組合員数は北海道が八二、〇〇〇人、全国が五〇〇万人、准組合員数は北海道が二五万人、全国が四一九万人となります。こうし

てみると北海道は准組合員の割合が高いんですね。戸数も同じで、准組合員戸数が二四万戸もあります。正組合員戸数が約六万戸ですから、准組合員戸数はその四倍になるんです。全国は正組合員戸数が四三三万戸、准組合員戸数が三四万戸ですから、北海道ほど差があるとは言えません。つまり、北海道の農協は、准組合員のシェアが非常に高いという特徴を持っています。このような組織基盤の中で、農協をどのように見ていけば良いのかということが一つの課題となります。

2. 協同組合らしいJA改革の視点と論点

JAグループの改革は、平成三年の全国農協大会決議から始まっています。単位農協の広域合併で自己責任経営による事業機能の高度化を図るとともに、県連と全国連を統合して簡素化し、連合組織を一段階にする。こういう方針が決定され、全国各地で農協合併が進んでいったのです。その流れは現在もありますが、昨年の第二四回JA全国大会以降、方向性が若干変わりました。すでに合併がかなり進展したということもあるのですが、「オンラインワンを目標そう」「小さくてもよくやっている農協はいいじゃないか」といった評価も出てきたんです。「小粒でも頑張っている農協は評価しよ

う」といった動きです。

たとえば高知県の馬路村農協がそれに該当します。馬路村はゆる産地として有名な所ですが、今なお農地基盤整備を行ってゆずの栽培面積を増やしているんです。そして、ゆずの加工、直売も行っていきます。こういう元気のある農協があるんですね。静岡県の三ヶ日町農協もそうです。青島という品種で有名なみかん産地です。全国的に見ればみかんは過剰により面積が縮小していますけれども、ここは今でも栽培面積が増えているんです。馬路村農協同様、非常に元気がある未合併農協です。

このような農協を評価する動きが出てきているのが昨今の傾向です。単なる規模拡大ではなく、組織の質を評価していこうじゃないかといった動きです。平成三年の全国農協大会では農協の自己責任体制の強化や機能の充実を図っていくために合併が必要だと言われたのですが、広域合併を果たした農協が必ずしもそうならなかった。単に複数の農協が合体したケースも多くて、その成果は十分に上がっているとは言い難かったんです。しかし、基本方向は広域合併に向けて組織整備が進展していると理解すべきです。

ところで、農協改革を進めるにあたって、私はトップの力が非常に重要になってきているのではないかと感じています。組合員の力

をどう高めていけばいいのか、効率的・効果的な事業をいかに行っていけばいいのか。つまり、経営者として、組織のトップとしての資質の向上ですね。組合員力の向上、事業の発展、経営の発展。こうした理念を踏まえたトップがいかに運動家としての資質を発揮していくのか。これが重要ではないかと考えています。

トップの力というのはすぐに形成されるわけではありません。昨年十二月、鳥根県で開催された新世紀農協研究会に参加したのですが、全中会長並びに北海道農協中央会会長をされている宮田勇さんも出席されました。お話を聞きましたら、いずも農協の萬代宣雄組合長さんとは農協青年部時代からの仲間なんです。かつての農協青年部の仲間達が、全国各地にいるそうです。皆さん、こういった若い時の連帯感の中でトップとしての力を醸成してきたんです。トップとしての資質は急に育つものではないんだなと感じました。正に運動ですよ。

北海道で言えば士幌町農協が該当するでしょう。戦前の産業組合や農業会からの蓄積があつて農協の力がだんだん向上していった。そして、太田寛一さんというリーダーがいて、安村志朗さんというリーダーがいた。トップがトップを育てる土壌があつたんです。これも組合員力だと思いますし、組合員の連帯感によってこうした土

壤が形成されていったんじゃないかと考えています。もちろん事業に関する取り組みにおいても組合員力が発揮されています。例えば戦後の農産加工については、猛反対があつた中で安村さん等が豆類の落ち穂拾いで少しずつ備蓄してきた内部留保資金等も活用して発展させてきたわけです。

事業に関して言えば、私は短期的な視点だけでなく、財務基盤や資本をしっかり形成してから行うことが重要になってきていると思つています。グローバル化の時代、グローバルの時代などと言われ、情勢がどんどん変わり、組合員ニーズもどんどん変わつていくのですが、新規事業を始めようといった時、財務基盤が不十分であればうまくいかないでしょう。また、財務基盤や資本を形成するにあたっては、組合員が納得して出資金を増額してくれなければなりません。ということは、信頼関係が必要だということなんです。こうした組織のファンダメンタルな部分を重視しなければ、次のステップへは上がれないということです。

ところで、組合員のニーズに関して議論すると、北海道の場合、兼業機会が少ないですから、農業をどうすれば良いのかといった経済面のニーズの必要性を検討してしまう傾向にあります。しかし、それと同時に、最近は社会的あるいは文化的な事業活動も求められ

ています。それを農協役職員の請負型ではなく、組合員参加型の事業活動として発展させていかなければなりません。高齢者の福祉事業活動などもそうです。これは何も北海道だけの話ではないんですけれどもね。

そうなると組合員に対する教育のあり方も問われてきます。組合員に焦点を当てた教育、研修、広報活動をどう充実させていくのか。ただ研修所に集まつてもらつて先生が講義するのではなく、具体的な事業活動を考える中で、教える側と教えられる側が共に学び合つていく。潜在的なものを開花させること、組合員の持つている能力を引き出すことが重要なわけですから、一方的なものではダメなんです。

農協改革をめぐる動きを整理しておきます。今は小泉内閣ではありませんから、若干トーンダウンしたかもしれませんが、総合農協の解体的再編論は今でも財界で議論されています。規制改革会議などでこのような議論がされている。信用事業の分離についてもここで話し合われています。

それから、農林水産省のトップダウン的改革論。これは農協が農業中心に事業展開すべきであつて、赤字であれば生活事業等はやらなくてもよい。赤字ならば切り離せ。信用事業分離という選択肢も

あるはずだという論理ですね。不祥事があつた全農に対する過剰な業務改善命令等がベースにあると感じています。

次に内発的改革論です。これは一九九一年から始まった一連の農協改革の流れをくんでいるものです。JAグループによる改革案ですね。日本の農協は一般に保守的で、現状維持志向が強いと言われていますが、それをどう改革していけばよいのか。口で言うのは簡単なんですけれども、それが問われています。昨年のJA全国大会で『農』と『共生』の世紀を実現するための『農と食を結ぶ活力あるJAづくり』を指すとされたのですが、これを各地域でどう実現していくかが大きな課題になっています。地球規模でみると、貧富の格差の拡大、飢餓と飽食の共存、紛争の激化、環境問題の深刻化、市場経済の失敗、政府の失敗など、いろいろな問題が複合的に発生しています。こうした中で、二十一世紀は市民が連携した協同組合セクターのあり方が問われている。それと、営利企業セクター、公益性・公共性を発揮する政府セクター、そして協同組合セクターの三つが併存し、かつそれぞれが独自にどう展開していけば良いのか。口で言うのは簡単なんですけれども、グローバルかつグローバルの視点で改革の方向性を考え、地域農業を維持・発展させていかなければならないということです。

実は生協も六十年ぶりの大改革の最中にあります。二〇〇七年四月に参議院、五月に衆議院で生協法の改正が可決され、二〇〇八年四月にその改正法が施行されると共済事業が整備されます。また、生協は生活購買面の事業連が各地域で展開していますが、現在、事業連を軸に日生協との機能の一体化が進んでいるんです。これまでに日生協は中央会としての機能と卸売連合会や共済連としての機能を併せて持っていましたけれども、今後は共済連としての事業の分離や生活購買面の事業連の機能高度化によって中央会的な性格が強くなっていくようです。それと、生協の単協組合員として隣接県の住民も認められ、事業連の一体化も進んでいます。生活クラブ生協のような分権的に地域密着型を目指すタイプ、あるいは一般人が自由に利用できるようなタイプなど多様化も進んでいます。最近、コープさつぽろも経営が改善され、ずいぶん元気になったと聞いております。この点は太田原先生が詳しいのでしようけれども、いずれにしても農協だけではなく生協等も含む協同組合セクターの改革が求められているということです。「自分の役員の任期中だけは何とか組織が維持できれば……」といった消極的傾向のトップもいます。このような傾向を打破して改革を行っていく。高齢者福祉や社会的・文化的な取り組みを含めた上で、改革を行っていくこと

が求められているのです。

3. 協同組合らしいJ A改革の理念的原点の明確化

協同組合セクターの一翼である農協の改革は、一九九五年にICA（国際協同組合同盟）の全体総会で決議された「21世紀の協同組合原則」、それとセットの「21世紀協同組合の宣言」を掲げ所にして取り組むべきではないかと思っています。もちろんJ A綱領もこれを受けて制定されています。J A綱領の前文には「わたしたちJ Aの組合員・役員は、協同組合運動の基本的な定義・価値・原則に基づき行動します」というように明示されていますが、最近はこの前文が組合員や役員にもあまり理解されていないようです。しかし、一方ではこのJ A綱領とICAの協同組合原則を総代会資料に載せている農協がだんだん増えているんです。鳥取中央農協や新潟県の十日町農協の総代会資料には、オモテ表紙の裏側にJ A綱領、ウラ表紙の内側にICA原則が掲載されています。このように、これらを組合員教育に活用している農協が少しずつ増えてきています。

日本で、欧米の新世代農協や複数国にまたがる広域農協について書かれている最近の本の中には、事業体としての農協改革に焦点が

おかれ過ぎているケースも見られます。このような本にはアソシエーションあるいは、組合員の結集力、結合体としての協同組合の本質にはほとんど触れていないんです。事業にだけ焦点を当てて、

「日本の農協は遅れている」というんです。ICA原則は経済的なニーズだけでなく、社会的・文化的なニーズも視野に入れています。それもほとんど触れずに経済面だけふれて「日本の農協は欠陥がある」という一面的な議論もみられます。農協の問題点についてはいつでも指摘できますが、農協をどう変えるのかといったことについての考察が弱い。だから私はICAの定義が大事だと思っているんです。本当に農協を改革しようというのであれば、この定義を重視しなければならぬです。協同組合というのは誰かから助けてもらう組織ではありません。セルフヘルプ（self-help：自助）、自己責任、民主主義、平等、公正、連帯などの価値を基礎として変えていかなければならないんです。それが協同組合です。ですから自助、そして互助を基本にして事業改革に取り組んでいかなければいけないのですが、事業だけを捉えて議論しているんです。これでは本当の意味での改革につながりません。「もうICAの原則なんて古い」と書かれているものもあり、全く実態を知らないんだなと感じてしまいます。『新原則時代の協同組合』は私が農林中金の基

礎理論研究会で座長をやった時に監修した本ですが、そこには21世紀の協同組合原則の戦略的意義を明確にしています。あれからもう十年以上経ちました。

協同組合原則は七つあります。一九六六年の原則は六つでしたけれども、一九九五年に現在の七原則となり、定義・価値・原則の三つをセットにして、協同組合アイデンティティと呼んでいます。新しい原則には第四原則に「自治と自立」と第七原則に「地域社会への関与」が明示されています。後者の第七原則は協同組合の社会責任に関わる原則です。男女共同参画、ジェンダーという視点は、第一原則の「自発的で開かれた組合員制」、第二原則の「組合員による民主的管理」に明示されています。

七つの原則のうち、第一原則から第三原則までは組合員の参画を重視しているんです。部会組織なども含めて、組合員が参画して協同組合を作っていくんだという点が前面に出ています。それに加えて、後半の第四原則から第七原則までは協同組合の内外に関わる社会的責任を重視しています。要するに、協同組合というのは経済的目的だけではなく社会的目的も兼ね備えているんだということです。ですから儲からないからといって地域から撤退し、海外に工場を移転するような営利企業とは全く性格が違います。

ところで、ICA原則が最初にできたのは一九三七年（昭和十二年）です。次の原則が一九六六年（昭和四十一年）。そして一九九五年（平成七年）に再び見直されました。ほぼ三十年周期で見直されているんですね。原則は変えればいいというものではありませんが、協同組合の伝統をきちんと守った上で、時代の変化に適応させながら見直しがなされています。絶対に変えてはならないという原則は継続してきちんと明示しているんですね。

一九八〇年、カナダのレイドローが『西暦二〇〇〇年における協同組合』を執筆しました。この本には、協同組合は経済的目的と社会的目的を兼ね備えており、これらはコインの表裏の関係にあるんだと書かれています。経済的目的と社会的目的は絶えずセットの関係にある。それが協同組合だと言っているんです。ところが、外部環境が変わるとカメレオンになるとも書かれています。例えば、規制改革会議に批判されるとそれに反応する。カメレオンは外敵から身を守るために色を変えるのですが、本質は変えない柔軟性を持っているんだということです。定義と価値だけを重視していても柔軟性は得られません。これらを媒介する懸け橋となる七つの原則を通じて柔軟性を保持できます。JA綱領もこうした協同組合の定義・価値・原則を踏まえた上でまとめられました。実は私もJA綱領

の検討委員だったのです。その時JAの社会的な役割が重要だということを主張し、報告書にも盛り込まれています。

4. 新世紀型JA改革のキーポイントは何か

今、JAの組織基盤が大きく変わってきています。組合員の高齢化が進んでいる一方で、農法の転換、低コスト化、高付加価値化、法人化、女性・高齢者を含む起業などといった新たな取り組みも生まれてきています。こうした新たな波が発生しているんですね。このような元気な取り組みに注目する必要があると思います。

山口県阿武町の農事組合法人福の里は、集落営農の中の女性部が加工部、野菜部などを設置しています。加工部の餅生産は特に有名です。JAあぶらんど萩管内の取り組みですが、農協はこうした付加価値をつけて農産物を販売する取り組みを後押ししています。

山梨県甲州市には「らくらく農業推進委員会」という組織があります。この地域には約4ha、二〇〇筆に及ぶ段丘上の桃園があったのです。この農地を基盤整備して三・五haの一枚の圃場にしました。さらには低樹、背の低い樹木ですね。それを過密にならないように植えて、雑草の繁殖を抑制するマットを敷き、薬剤の散布を少なくしました。これにより作業能率が五割以上も良くなり、さらには高

齢者が農作業を行いやすくなったんです。そうすると、高齢者が元気になるんですね。この組織の影響により、隣接する市町村のある地域では、第二の「らくらく農業推進委員会」が誕生しているんです。ちなみに私は農山漁村いきいきシニア活動表彰の審査委員長を担当しているのですが、昨年度、その農林水産大臣賞を受賞したのがこの「らくらく農業推進委員会」でした。

青森県鶴田町の直売も有名です。全国的にみると直売は民営が多いのですが、ここでは町役場が支援しています。鶴田町は「朝ご飯条例」の制定とその一環として取り組んでいる学校給食への地元食材供給で有名な所ですが、Village Conductor of Womanという直売に関わる組織も注目されているんです。このメンバーは直売所で売上が二年間にそれぞれ三〇万円以上ないと脱退することになっているんです。会員資格を喪失するわけです。こうした緊張感を持ちながら、一所懸命メンバーに取り組んでもらおうという主旨なんです。「出せばいい」というのが一般的な直売の特徴ですが、ここはそうではない。緊張感を持ってやっているという所に、私は注目しています。

それから、現在、広島県中央会の会長をされている村上光雄さんが組合長をされている三次農協を取り上げておきましょう。ここは

高齢化、過疎化が顕著な所です。合併後十三年が経過したのですが、この間に正組合員が十四%も減少したんです。この数は合併前の一農協分の組合員数に相当するそうです。このような危機意識から、青壮年、女性にターゲットをしばった組合員の拡大運動に取り組み始めました。その結果、二〇〇五年度には正組合員は一、七五二人に拡大、うち女性は一、二二一人を数えます。また、男性の新規加入の七三%は四十歳代以下だそうです。この活動を推進するにあたって活用されたのが「家の光」です。「何で組合員にならなければいけないのか」「お金を払って組合員になるとどのようなメリットがあるのか」という疑問を女性部や青壮年部の皆さんが投げかけてくるのですが、こつした疑問を「家の光」の組合員講座を読むことで理解してもらおうそうです。組合員の疑問を農協が受け止めているわけですね。このような緊張感が組織の活力の源泉になっているんだなと感じています。

それから総合ポイントカードの導入も検討しています。全国的に見るとポイントカードはまだ整備されていません。先進事例はいずれも農協です。合併して出雲市になりましたけれども旧平田市周辺での取り組みが活発です。ファミリーマートと提携して、Aコープだけでなく市内にフランチャイズ契約を結んだ十一店舗ある農協直営



のファミリーマートでもカードが使えます。その一方で、イオングループの大型スーパーが撤退しました。また、ポイントカードの会員登録数と共に准組合員数も増加しているんです。ポイントカードにはこのような効果があるのですが、三次農協でもそれを導入しようとしています。北海道でこうした取り組みが軌道に乗るかどうかわかりませんが、これも注目すべき取り組みだと思います。

女性を対象とした活動と例えば、長野県の松本ハイランド農協のJA女性大学が有名です。フレッシュミズを対象にした研修会で、期間は三年に及びます。いろいろなカリキュラムがあつて、最後には修了論文を書いてもらうんです。子連れ受講者が多いので臨時幼稚園を開設して対応しています。若いフレッシュミズ達が子供から解放されて伸び伸びと勉強ができるんです。もちろんその日は家の農作業からも解放されます。私がヒアリングした修了者は「こんな素晴らしいことを農協はやってるんだ」と感動して、近隣でつきあいのある若い農家女性にフレッシュミズへの加入を呼びかけ、組織活動の輪を広げられていました。また、ある時、たばこ生産農家の女性が、雹の被害にあつたので女性大学に出られないと言ってきたそうです。その話を聞いた担当者は、支所で補習をやってくれたんですね。おかげでその方は出席回数クリアでき、単位が取得で

き、無事修了されました。ちなみに、ここの研修でも「家の光」が大いに活用されています。

いろいろな事例を紹介してきましたけれども、私がここで言いたいののは、農協による組織活動の単位が変化してきたということです。これまではいえ主体でした。ところが、先ほど紹介した農産加工グループ、フレッシュミズを対象とした女性大学などは、目的別の小集団なんですね。組織の単位が変わってきているんです。長野県の北信州みゆき農協には子供グループや女性グループがあります。組織活動の代表イコール世帯主ではないんです。滋賀県のグリーン近江農協では、女性部員三人が集まって活動すれば一定の助成金を出しています。そして、本体の女性部をスリム化させ、役員活動はほとんど行われなくなっています。支所活動を中心に行い、「一年に一回農協の行事に参加してください。あとは自由に仲間で活動してください」といった方針を持った女性部でもあります。かつては「女性部に入るといろいろな役職をやらされてイヤだ」なんて話をよく聞きましたけれども、目的別の活動となるとこのような不満を言う人が少なくなるようですね。こうした組織活動の単位の変化も、農協改革を行う上で重要だと思っています。

総合農協における事業面の専門性と総合性についてお話しします。

全中総代会の資料に組合員満足度に関するアンケート調査結果が掲載されていました。それによると、育苗施設、倉庫、カントリーエレベーターなどといった営農関連施設、これは満足度が一九・八%と高く、かつ必要性も七一・一%と高いんですね。しかし、生産資材購買は満足度がマイナス二・五%と低いんですね。必要性は七九・六%と高いんですね。生活物資購買は満足度がマイナス三〇・三%とさらに低くなっています。必要性もマイナス三二・一%と低いんですね。これは抜本的に改革しなければならない部門と言えますね。こうした組合員の声がJ A事業改革の今後のあり方を示唆しているのではないかと考えています。

営農指導の強化も必要です。先ほどお話ししたグリーン近江農協の作目部会組織では、県農業試験場と連携して農薬なしでカメムシを防ぐという新農法を開発しました。畦畔二回草刈り、額縁別収穫技術、色彩選別機械利用技術をシステム化したものなのですが、この取り組みが二〇〇五年に開催された愛知万博で「愛・地球賞(Global 100 Eco-Tech Awards)」を受賞したんです。新技術を作る部会なんてそんなにありますから、注目すべき取り組みだと言えますね。いわて中央農協やみやぎ登米農協でもこのような取り組みが行われています。低農薬栽培を推進し、ブランド米を確立しているんです。

前回の農協大会では「ナンバーワン宣言」というものが提案されました。ナンバーワンというのは必ずしも全国一だけではない。地域内のナンバーワン、県内のナンバーワンもある。そういったナンバーワンも大事にしようということです。私も同感です。よつてい農協へ行くと馬鈴薯やゆり根の出荷額が全国一なんだという話をよく聞きますが、それはそれで良いことです。でも、誰にもマネできないオンリーワンというものもあります。個性というものです。

これからは、こうした個性を引き出す営農指導が重要になってくるのではないかと考えています。和歌山県の紀南農協もそうです。平坦で効率の良い地域はナンバーワンを目指そう。中山間地域はオンリーワンを確立しようという戦略です。地域の実態に合わせるため、ナンバーワン戦略とオンリーワン戦略を分けて確立しているんですね。農協の計画で大事なものは三カ年計画など中期計画だとよく言われますが、その計画を策定する場合、地域密着型の戦略が確立されているのかということがポイントになると思います。地域の実態に合った戦略が確立されていなければ組合員のやる気は湧かないでしょう。そのようなプランでなければ意味がないんです。

産地形成やマーケティングにおいても、個性を重視しなければなりません。例えば、いちこの出荷ですが、栃木県をはじめ有力産地

では直販を戦略的に重視しています。その直販を円滑に行うために、栃木県のが野農協では時間と労力を要する選別を農協のパッケージセンターで実施するようになったんです。主な出荷先は生協や量販店です。JA全農とちぎの資料によると、現在こうした出荷が全体の七〇八%を占めているそうです。いずれ一〇%を超えるでしょう。しかし、これ以上、このような出荷形態が増えると県域対応の限界に直面すると思います。全農では園芸作物の出荷は県本部の仕事であるとしているのですが、卸売市場への出荷はそれで良いとしても、直販はそれではダメです。県域を越えた取り組みを行っていかないと、川下での対応が困難になります。スーパーや外食産業に對抗できなくなるでしょう。要するに、全国本部ではなかなか理解してもらえないような柔軟な販路戦略の確立が求められているということです。これもJA改革に関わる課題の一つと言って良いでしょう。

5. 新世紀型JAの改革の展望

先ほど組織のトップについてお話しましたが、トップをはじめ管理職には必要不可欠な条件というものがありません。そのことをお話ししましょう。えひめ南農協の林正照組合長が『光と夢と幸せ

を求めて』という本を書いています。そこに興味深いことが書かれていますので紹介します。管理職には必要条件があり、それは、①問題を発見し解決する能力、②計画する能力、③組織を組み立てる能力、④コミュニケーション技術、意志伝達能力、⑤動機づけの能力、⑥部下の育成能力の六つで構成されているということです。それから、この本には「日常の中の十ポイント」というものも書かれていますね。①組合員に対しては小さな親切を欠かさない。②家族は円満に。③職場は笑顔、協調、団結。④日常においても業務を常に意識して。⑤推進は自ら燃えて他を燃やす。⑥運動は企画実践 結果 反省 追跡 達成のサイクル。⑦目標は必ず達成。一度決めたことは絶対にやる。⑧事務処理は早く正確に。未収金は回収を早く。⑨報告はタテ・ヨコを忘れずに。⑩常に自己啓発を。以上十点です。

この本を書かれた林さんは産業能率大学で学ばれ、農協勤務で利用するバス停での待ち時間でも本を読まれる大変な読書家なんです。また、えひめ南農協管内は、情勢の厳しいみかんを基幹作物とする中山間地域に属します。島嶼部も含んでいて、島には支店がありません。農協が船を持っているんです。林さんはこのような複雑な土地条件を有する地域の農協のマネージメントをやっているんですね。

こうした経験を生かされて、今、お話したような管理職の条件を見いだしていったんだと思われませう。

次に新世紀型JA運動についてお話しします。新世紀型JA運動とは、一九九五年のICA大会で採択された「21世紀の協同組合原則」とJA綱領を重視した農協運動であり、EU諸国で活発に行われている農協運動やファーマーズユニオンの活動の複合化がこれに相当すると理解しています。これを日本でも創造すべきだと考えています。私はドイツのマールブルク大学に半年いたのですが、マールブルクという町にはファーマーズユニオンのプランチがあるんですね。そこでは、法律相談や税務相談を行っていましたし、ボンの連合会にはエコノミストを雇用して、絶えず欧州農業者連合（COPA）と連携しながら様々な農民運動を展開していました。調査に行った時、「もし欧州農業者連合から連絡があれば、ヒアリングはできませんよ」と言われまして、実際、待機することになってしまったんです。緊張感を持って仕事をしているなと感じました。WTO農業交渉の動向を見ると、不公正だと感じませんか。アメリカやEUには依然として輸出補助金が認められていますし、アメリカの二〇〇二年農業法は補助金を増やした上で不足払いも認めるものになっています。つまり、ダブルスタンダードを許してい

るんです。このような不公正を是正させるためにも公正さを求める運動は必要じゃないかと感じています。また、最近、北海道ではバイオエタノール開発が熱心に取り組まれていますね。農協系統も活発に取り組んでいますけれども、税金に関する問題をはじめ不透明な部分はまだまだ沢山あります。エネルギーの経済的主導権もつている石油連盟に対峙しなければならぬ場面が出てくるかもしれません。その時には、農業者だけでなく市民も味方につけて、バイオエネルギーの開発や利用を推進していかなければならなくなるでしょう。要するに、市民の理解を得るための運動が大事だということです。

6. 北海道における農協の役割

最後に北海道における農協の役割についてお話しします。先ほどもお話ししましたが、農協改革は重要な課題です。しかし、その実現に寄与する速効性のある取り組みはありません。ですから、まず第一に組織基盤を如何に確立すれば良いのかということを考えなければなりません。その参考になる事例をいくつか紹介します。

女性部のメンバーが熱心に活動を行っているのは、あきた北農協と鳥取中央農協です。前者は比内地鶏の生産だけでなく、「家の

光」を活用した女性部活動や生活文化活動を展開していることでも有名な農協なんです。「家の光」の購読部数は一、一四五部、その普及率は三〇%以上に及びます。後者は女性グループが運営するレストランや女性店長の7つの直売店があることで有名な農協です。自治体の遊休施設を利用して女性部のメンバーがレストランを営業しているのですが、その運営を農協が全面的にバックアップしています。赤字が発生した場合は農協が全額補填、利益を得た場合はそれをメンバーに分配するという方針なんです。

都市部にも参考になる事例があります。例えば横浜農協です。横浜という大都市のイメージが強いですが、三、四一九haも農地があるんです。神奈川県で一番農地の多い市町村が横浜市なんです。市街化調整区域にも二、六四〇haの農地があります。これだけ農地が維持されている背景には、一九六〇年代後半に市長だった飛鳥田一雄さんが推進したグリーンベルト構想の影響があると思います。都市の中に、都市機能としてのミニマムの農地を残そうという方針がその中に盛り込まれていて、一〇〇%助成金を出した基盤整備まで行われたんです。だから農地が維持され、組合員も支障なく農業ができるというわけです。

同じ神奈川県にある三浦市農協は、周年野菜生産を確立したこと

で有名です。だいこん、それと海洋深層水を活用して生産する春キャベツが主な作物となります。相場の変動に苦しめられることが多いのですが、それを農協共販で何とか対応しようとしています。中でも、レディーサラダというサラダ専用種の小型だいこんの栽培推進、それと六八人が参加する松輪というキャベツ出荷グループの活動が注目に値します。

北海道ではふらの農協に注目しています。昨年、クミカンを廃止するといった記事が北海道新聞や日本農業新聞で報道されましたけれども、厳密に言うとクミカンを廃止するわけではないようです。いわゆる土幌方式への転換のようです。年間支出を計算し、その金額を一月一日積んで、プラスからスタートさせる方式に変えるということです。奥野組合長に尋ねましたら、廃止と言わないと組合員に意識改革のねらいを理解してもらえないとおっしゃっていました。要するに、組合員に刺激を与える意味で廃止と言っているんですね。それと、ふらの農協は機構改革を行っています。統括管理本部、信用事業本部、営農販売事業本部などを設けて分権型の体制で取り組んでいます。この機構改革がどのような効果をもたらすのか、私は注目しているんです。

いろいろと述べてまいりましたけれども、いずれにしても北海道

はわが国の耕地面積の四分の一を占めています。産出額のシェアは十二・六%、カロリーベースでみると二二・四%を占めるわけです。今後北海道が日本農業を牽引するリーダーであることに変わりはありません。このことをしっかりと認識する必要がありますでしょう。

先ほど農林公庫へ行ってお話を聞いてきたのですが、道と連携しながらスーパーL資金をはじめいろいろサポートを行っているようです。スーパーL資金を活用して施設更新や農地購入は今でも盛んに行われていて、今年度から三年間限定とのことですが、金利ゼロ資金を用意しているとのこと。需要があるため二年間で使い果たすのではないかと心配されていましたが、自治体加わって基幹産業である農業を支援していくという姿勢は非常に大事なことだと私は思っています。

心配なのは、北海道は依然として男性中心の社会だということ。もう少し男女共同参画が活発にならないかなあとも思っています。「あの農家は嫁が直売を始めたからおかしくなったんだ」という話を聞いたことがあるのですが、直売により労力の合理的配分が可能になるといったメリットがもたらされることだっているんです。それから、営農と生活は両輪なんだということをもっと認識してもらいたいです。嫁不足はここに原因があると考えています。



この点において、ふらの農協は先進的な農協だと言えます。若い都市部の女性を研修生として多数受け入れていきます。研修後、彼女たちは地域の担い手として自立するんです。中には、地元の男性と結婚される方もいらっしゃいます。こうした都会生まれ都会育ちの女性の感性が経営に活かされることだってあるのです。

農協合併についても少しふれておきましょう。先ほどお話ししたように、馬路村農協をはじめ、小さくても機能している農協はあるんですよね。やはりそれは評価しなければなりません。都府県の場合、赤字の解消を目的とした合併が多いですが、これだって経営が改善

されなければ意味がないんです。ですから、ただ単に広域合併を進めるのではなくて、合併の利点を十分に認識した上で、十勝方式の農協間ネットワークの拡充や近隣の農協から少しずつ合併していくケースがあっても良いのです。合併のあり方は複眼的に見るべきなんですよね。しかし、基本的方向は、合併による事業機能の高度化と自己責任経営の確立である点を重視すべきだと思います。

北海道の農協の役割について十分お話できませんでしたが、時間もきましたのでこれで終わりとさせていただきます。どうもありがとうございます。

討論

太田原　　まずはじめに北海道農業と農村の特徴、続いてJA改革に関する理論がどうなっているのか、いろいろな事例を取り上げながらお話いただきました。JA改革に関しては、財界側の解体的再編論、農水省のトップダウン的改革論、それからJAグループの内発的改革論など、いろいろと論じられています。財界は「総合農

協の使命は終わった」と主張していますが、JAグループはあくまでも「総合農協を堅持していこう」「総合性と専門性を統一していこう」というスタンスです。このことについて、われわれ北海道にいる人々がなかなか訪れることができない全国各地の事例を紹介しながら、わかりやすくお話いただきました。

さらにはEUの取り組みについてもご紹介いただきました。車の両輪と言える経済団体としての農協とファーマーズユニオンに関する話題が出てきましたが、このことも今後の北海道の農協のあり方を考える上で大変参考になると思います。

また、最後に北海道の農協の課題についてご指摘いただきました。北海道の農協は今なお農業関連事業に力点が置かれていることですが、これでは農水省の改革論に出てくる農協のあり方と変わらないうですね。そうではなくて、生活も重視すべきだと。営農と生活という観点が必要なのではないかというご指摘がありました。

「北海道は生活指導員がいないではないか」と私もずつと言いつつ続けてきたのですが、やはりその問題を指摘されてしまったなと感じております。

それから販売事業についてもご指摘がありました。北海道の場合、ホクレンが多様な販売ルートを確認してきているのですが、画一的な市場出荷にとどまっている農協がまだかなりあるんですね。この点についても、概して都府県の農協の方が進んでいると言えそうです。

ということで、北海道の農協が抱える課題は決して少なくありません。したがって、議論しなければならぬことも沢山あるのではないかと感じております。皆さん、ご意見でもご質問でも結構です。

どうぞ自由にご発言ください。

1. 営農指導と販売事業の連携の重要性

黒澤 全中が行ったアンケート調査によると、営農指導に関しては高いニーズがあるというお話でした。北海道においても、中央会はじめ系統全体として営農指導の強化に取り組んでいるのですが、組合員の不満は多いようです。都府県よりも北海道の方が技術水準は高いと思うのですが、それでも不満があるという話を聞きます。組織の合理化が進められる中で、営農指導に関わるスタッフも減少傾向にあります。こうした中、効率的な営農指導の実践が求められています。先生は全国各地を訪問されていらっしゃるようですが、こうした効率的な営農指導を行っている農協がありましたら教えてください。

白石 営農指導はすべての農協事業の基礎であると私は思っています。それが実践されている農協が島根県の雲南農協です。ここでは営農指導事業と販売事業がうまく連携しながら展開しているんですね。サラダホウレンソウの栽培から選果場での選別・包装・集荷までGAP（日本適正農業規範）マニュアルに基づくトレーサビ

リテイを二〇〇三年から導入し、農協の営農指導員とみどりちゃん委員会（生産者部会）の役員が一月に二回内部監査のため栽培現場を巡回し安全性と品質のチェックを行い、さらに研修会も行っています。しかも、地元の建設業者が出資して設立した有限会社形態の農場もサラダホウレンソウを出荷している。このような連携による当農協とコープこうべやスーパー等との安定的な契約取引が二五%を占め、年間二億円の販売実績を上げています。さらに、中山間地立地の農協らしく中国山地から松江市までの幹線道路上に十五カ所の産直店舗を配置して、高齢者や自給的農業者でも現金収入が得られる販路を開発している。さらにはエコ農法とトレーサビリティを重視した営農指導事業と産直事業を連結させていて、産直による販売実績は二〇〇一年の二・七億円から二〇〇六年には五・八億円に増大しています。

北海道で印象に残っているのは鹿追町農協ですね。営農指導員が秋の収穫後に個々の農家と相談し土壌診断結果に基づき、農家の目線で肥料設計を行っていますね。すなわち、「この単肥とこの単肥を組み合わせたらどうですか」「この単肥はいくらですよ」と情報提供するんですね。選択は組合員に任せて、それが決まると当農協の配合肥料工場で生産されます。このように、営農指導システムに組合員が積極的に参加しているんです。「値段が高い。商系の

方が安い」の次元で行っている指導ではなく、組合員の自己責任の上で行っている指導が評価されます。

消費者の反応について、もう少しお話ししておきたいと思います。先月、鳥取中央農協の直売所が軽い食中毒を起こしたキノコを販売したという報道がありました。調査した結果、これは誤報だったんです。購入者が十分に焼かないで食べたために体調を崩したというのが事実だったのですが、なぜか中毒キノコ騒動として報道されてしまったんです。しかし、農協はこの事件を真摯に受け止めて、「商品の食べ方をまで徹底して告知しよう」という方針を立てたそうです。この一件を通じて、「消費者とのコミュニケーションは、商品を売るためだけでなく、商品の安全を維持するためにも必要なんだ」ということを学んだそうです。

黒澤 営農指導が単に技術伝達のためだけにあるのではないということになりました。ところで、雲南農協管内では建設会社出資の有限会社が農業に参入していて、その企業もサラダホウレンソウを農協に出荷しているとのことでした。市場対応を含めた営農指導の対象に、この企業も入っているということなのですか。要するに、参入企業も農協の傘下に入っていると理解してよろしいのでしょうか。

白石 そうです。建設会社出資の農場も当農協の正組合員になって、販売事業面で農家とこの会社の連携が販売面で相乗効果を上げています。一方で過疎化が進むこの地域では農協も建設会社も有力な就業機関です。建設会社には農家の世帯員も雇用されています。その意味で補完関係にあり、お互いが地域を支え合っているんです。主な出荷先がコープこうべ等であることをお話ししましたけれども、生協は一定の生産量がなければなかなか相手にしてくれません。ブランドだけでなくポリウムも必要なんですね。ここでは建設会社出資の農企業が農業生産に加わることで、その対応が可能になっています。

黒澤 ブランド作りのためには、消流担当職員が高いノウハウを持っていないといけませんよね。それを付与するために、農協はどのような対応をしているのですか。職員研修を行ったりしているのですか。

白石 雲南農協は営農指導と生産資材購買、販売の各課と地域単位の営農経済センターを統括する営農マーケティング事業部、マーケティングを前面に出した仕組みづくりによる研修会ではない営農指導員と部会リーダーの連携による産地づくりに特徴があります。

す。さらに、三十代後半の直売担当職員がリーダーシップをとり、ITを活用した産直事業における販売情報伝達システムを構築しています。インターネット（個人ごとのパスワード）や携帯電話での伝達や電話での録音で生産者の計画出荷や新規申し込みも行っており、他方POS連動システムでJA本店は時間ごとの販売状況を集信し、営農指導員はJA雲南のホームページに営農生活情報の提供や掲示板機能の利用をコーディネートしております。これからの営農指導事業はITを活用した双方向のコミュニケーションの強化と生協・スーパーなど川下や消費者のニーズと行動を敏速に収集整理して、タイムリーな栽培計画や収穫対応が求められております。

2. 信用事業の役割とその位置づけ

大田原 冒頭で申し上げましたけれども、いろいろな改革論が出されています。これは解体的再編論の中にも含まれると思うのですが、信用事業独立論がありますよね。これについて、最近、どのような評価がなされていますか。

白石 規制改革会議ではあまり議論されていないようです。それよりも、今、注目されているのは公認会計士の監査導入について

ですね。いずれにせよ、お金を扱う信用部門は透明性が求められるということなんでしょう。たとえば横浜農協では、信用部の職員がいきなり課長から「来週三日間休んでくれ」と言われます。その間、その職員の業務内容がすべてチェックされます。もちろん課長だって部長にチェックされます。部長は役員にチェックされる。何か発覚したら「二時間以内に来なさい」と言われるそうです。このような緊張感を持ちながら職員は業務に従事しているんですね。

信用事業は他の事業と連携しながら展開しています。ですから、分離すべきではないんです。先ほど営農指導の話が出ましたけれども、そこにどれだけ投資が可能なのか。運転資金が少なくなつた場合、そこにどれだけお金を回すことができるのか。もし、信用事業が分離されてしまったら、こうした判断はできなくなるでしょう。総合農協であるがゆえに信用事業と他の事業が密着していて、他の事業も機能するということです。

今年三月に、関東のある農協に行つてまいりました。地元の地銀も管内の農家にかなり熱心に融資を始めているようなのですが、地銀は営利企業ですから、ちょっとおかしいなと感じたら債権回収が手早いそうです。そして、事後処理対策を農協が行わなざるをえないという事例を農協担当者から聞きました。信用事業がなければそのような対応はできませんから、やはり信用事業は分離すべきでは

ないと考えています。

太田原　私も信用事業分離論には反対です。かつては「信用事業はいくら稼いでも経済事業に食い潰される。だから独立すべきだ」といった主張が通用したのかも知れませんが、信用事業の収益性がどんどん下がっていますからね。中金だつてはつきりと「総合農協としてやっていくべきだ」と言っています。なぜかと言うと、信用事業を分離してしまつたらより一層コストがかかるからなんです。外務員が必要になるし、コンサルティング業務も行っていかなければなりません。そうすると、他の金融機関に太刀打ちできません。総合農協の中の一事業として展開していかなければ信用事業の機能は発揮されないと白石さんも私も理解しているのですが、信連の皆さんはどのようにお考えですか。

高橋　私もそう思います。信用事業がなくなつてしまえば営農指導はできません。適正な信用供与の枠内で、他の事業に貢献していかなければならないということです。信用事業は営農指導や経済事業と分離して語れるものではありませんから、総合農協の一事業として今後も展開していくべきだと思っています。

3. 地域協同組合論に対する評価

大田原 続いて、地域協同組合論について議論したいと思います。最近、地域協同組合論者が増えてきたような気がするのですが、これについてどのようにお考えですか。

白石 現実的な話をすれば、農協は地域協同組合に近づいてきていると思うんです。准組合員が増えていますし、都府県の農村では兼業農家が圧倒的多数を占めています。このような方々を基盤にして農村が成立しているということは否定できません。

しかし、増加する准組合員が正組合員の資格を得たいのかと言うと、そうではないんですね。信用、共済、福祉事業などを地域住民に利用してもらって、社会的貢献を果たしていこうという農協もあります。そのような農協の准組合員が制度の改正を求めているわけではないんです。もし、制度の改正を求めているのであれば、「総代の枠を准組合員にも与える」「一人一票という議決権を変える」といった要望が出てくると思うのですが、そんな話は聞きませぬね。准組合員のシェアが大きい都市近郊では、都市化の圧力を跳ね返すためにはかかって正組合員中心の運営を行うべきだという農協があるくらいです。横浜農協がその典型ですね。

大田原 現状はわかりました。ところで、そのような現状にある中で、最近、「俺は地域協同組合論者だ」なんて言う人が増えていくような気がしているんです。このことについて、どうお感じですか。

白石 そのようなことをいう方は実態を十分見ていないと思いますね。

大田原 藤谷グループがそうですね。「農業だけではなく生活も重視すべきだ」「地域ともっと結びつこう」「准組合員の意志をもっと尊重しよう」などと言っているのですが、そんなの当たり前のことですよ。その当たり前のことをやっている農協が地域協同組合だと言っています。また、これとは別にいわゆる「正統派」地域協同組合論者がいますよね。「農協法第一条を変えろ」「農民の協同組織ではなく地域住民の組織としろ」といった主張をする人達ですが、けれども、このような人達は今でも健在ですか。

白石 かつては、鈴木博さんなどですね。理論が非常に抽象的ですよね。

大田原 私は地域協同組合というのではないと思っています。

藤谷先生の理論を含めて受け入れられません。地域協同組合論者は、地域協同組合という言葉を使いません。それが問題なんです。この言葉を真に受けている農協が結構あって、「うち地域協同組合だから営農指導員は減らす」なんて方針を掲げているんです。つまり、このような農協は地域協同組合という言葉を利用して合理化をはかっているわけでしょう。非常に困ったことだと思いますね。

白石 藤谷先生の場合は、農協の地域組合化を五段階に区分して、現行法では第三段階の「准組合員の運営参加への実質的配慮」までであり、第四段階の「准組合員の運営参加権の拡大」や第五段階の「正・准組合員資格の廃止」と区別され、現段階は第三段階にまで限定した積極的取り組みを主張され、柔軟で妥当な見解だと評価しています。

一人一人顔が違うように、農協の性格もそれぞれ異なります。それに、日本の農協も年々多様化してきています。Ⅱ種兼農家率が高い地域もありますし、准組合員が多数いる農協もあります。このような中、実態と法制度がそぐわなくなってきたというのであれば、法制度を変えれば良いですよ。しかし、そんな要求は出て来ていませんよね。

大田原 白石先生と私の意見はだいたい一致していると思います。

兼業化が進めば、農業以外の様々な要求にも応えていかなければならないのは当然です。しかし、その場合でも核となるのはやはり農業なんです。そこは外せないでしょう。そうでなければ農協ではなくなりますからね。

4. 北海道の農協と都府県の農協の相違点

志賀 北海道の農協は都府県の農協からどのように見られているのか、お聞きしたいと思います。先生がご指摘されたように、北海道の農協は農業関連事業に力を入れています。しかし、それだけに集中していると農林水産省が目指す農協のあり方と一致してしま

うことになりそうです。都府県では農協のあらゆる可能性を引きだそうという内発的改革論を支持する農協が多いようですが、そうすると北海道の農協は片手落ちではないかという批判を受けかねません。この点について、どのようにお考えですか。

白石 平均像を語るのには非常に難しいのですが、北海道の農協に対する私の印象は、農業関連事業に熱心な農協が多い、総代や理事などの男女共同参画が遅れている、生活関連事業活動が遅れてい

るといふ二点に集約されます。とにかく男性主体でゆとりがないですね。

しかし、ゆとりがないという点は都府県にも言えることなんです。先ほど、十勝農協連の方々とヨーロッパに視察へ行つたと申しましたけれども、その視察を依頼した時、受け入れ先であるフランスの農協連合会の職員の方が「七月初旬から一カ月休暇をとるので、その間は対応できませんよ」と言つんです。ドイツのある教授も夏季はマジヨルカ島で長期のバカンスをとっています。こんなこと日本では考えられませんよね。それが良いのかどうかは別として、ゆとりがないというのは何も北海道だけの問題ではないんです。

しかし、男女共同参画、生活関連事業活動が遅れているのは否めません。太田原先生や私が審査している「家の光文化賞」という賞があるのですが、もう何年も北海道から受賞しAは出ていません。生活文化活動の弱さがここにも表れているような気がします。

営農面の強さは否定しません。皆さんが感じのとおりです。それから北海道ブランドの強さ。これも感心しています。大垣に本社がある吉田ハムは飛騨牛ブランドを育てたことで有名ですが、土幌農協が供給するしほろ牛の販売にも熱心なんです。北海道産ということが消費者へのアピールになるからなんです。飛騨牛に比べれば値頃感があり、外国産に比べれば安全性が高い。しかも北海道の

自然の中で育つた牛である。このようなことが消費者に良い印象を与えているので、「しほろ牛」は売れるんです。また、消費者アンケートを行つてわかつたのですが、関西や中京圏よりも関東圏の消費者の方が北海道ブランドに親しみや認知度が高く出ています。

志賀　　ということは、営農面はこれまでどおりやつてくれ。あるいはもっと強化してくれ。しかし、生活面や文化面をもっと強化してくれなければ困るじゃないか。それが北海道の農協に対する都府県の農協の要望なんだと。そう理解してよろしいのですか。

白石　　契約型や直販型取引きほもつと強化すべきです。吉田ハムの事例を紹介しましたがけれども、このような北海道の農協と連携したいといった組織が都府県に沢山あるんです。それが北海道の農協にとってプラスになります。ですから北海道モノロー主義は捨て去つて、都府県の農協ともつと連携して欲しいと感しています。北海道の農協の取り組みと都府県の農協の取り組みの相乗作用によって、外食産業のチェーン店などが購入する輸入農産物に対抗できる可能性が高いと思います。農協間提携により、品揃えを重視するスーパーの期待に応えることだつてできます。都府県の農協の産直事業をはじめ、要望にもつと耳を傾けて欲しいですね。

大田原 専業農家が多い、すなわち農業経営中心の農家が多いということは、男社会であることの裏返しと言えるでしょうね。都府県の農協には女性主体の生産部会が増えてきているという話を耳にするのですが、そもそも女性のパワーが北海道とは違うのでしょうか。踊りやカラオケならば北海道の女性も得意なんですけれども（笑）、生活活動、文化活動になると都府県の女性に比べて弱い。この点について、我々はもっと考えていかなければなりませんね。

5. 農村女性の活躍と農協女性部への期待

黒澤 ちょっとと反論させていただきませうけれども、表面化されていない女性グループによる活動が北海道にも結構あるんです。「農協女性部の活動はどのくらいあるのか」といった網掛けをやる

から、そこに引っかけたてこないだけなんです。例えば、有志によって結成された農産加工や直売所を開設しているグループが道内各地にあつて、普及センターでもこのような活動に対して熱心に支援しています。「農協女性部で活動するのはイヤだけれども、気のあつた仲間達と活動するのならば良い」といった方々によって結成されたグループは結構あります。女性文化活動が不毛だなんてことは決してないんです。北海道の女性に代ってクレームをつけたいと

思います（笑）。

大田原 女性の文化活動が不毛だとは言つてませんよ。農協女性部の活動が不毛だと言つたんです（笑）。都府県の農協指導事業は、営農指導と生活指導の二本立てで行われています。ところが北海道の農協は生活指導に熱心に取り組んでいませんから、生活指導員がほとんどいないんです。他方で都府県は広域合併が進んでいますから、生活指導員がニケタ以上いる農協があるくらいなんですよ。黒澤さんのご指摘はごもっともで、かつての生改さんによって育てられた女性グループが沢山あるのは事実です。今でも普及センターがそれを支えています。農協はそれを普及センターに任せてしまったような形になっていますよね。

天野 統計によると、北海道に農協理事が総勢一、〇〇〇人以上いるのですが、うち女性理事はヒトケタしかいないんです。男女共同参画を果たすべきだという風潮があるにもかかわらず、このような状況です。しかし、先生方が先ほどからおっしゃっているように、専業農家の割合が高く、その影響で農村が男性中心の社会となつているので、女性が農協の取り組みに関わりづらくなつていっているという実態はあると思います。これを変えていかなければなりません

ん。労働力不足が問題になっていきますから、経営に果たす女性の役割は決して小さくありません。単なるパートナーではないんですね。

こういった意識を変えていかなければならないと思っています。

太田原 道の方々にお願ひなんですけれども、「生活指導員を配置しなさい」と各農協に指導していただけますか。中央会にも同じお願ひをしているのですが、何十回言ってもダメなんですよ。

白石 山口県に梨のもぎ取りを受け入れている観光農園のグループがあります。このグループに関わるすべての農家が家族経営協定を結んでいるんです。最初は「お父さんの介護は誰?」「食器の後片付けは誰?」などといった簡単な取り組みを行うに留まっていたのですが、これらがうまくいくようになると、もっとハードルの高い協定を結ぶようになりました。例えば、「何曜日は誰が休む」といった休暇制度を導入するようになったんです。これにより、ある農家では家族全員がゆとりを持てるようになりました。お母さんは休みの日に趣味の歌を歌いに行くそうですよ。家族経営協定の締結が女性の地位向上に貢献した一例と言えます。

6. 集落営農の設立・育成に関わる農協の対応

吉岡 二点質問させてください。まず集落営農についてです。

品目横断的経営安定対策の一環として集落営農の設立を推進することが明らかになった時、農協はかなりバッシングをしましたよね。組合員の農協離れを引き起こしかねないということで、集落営農の設立や育成に農協は積極的ではなかったのです。しかし、最近、状況が変わってきたように感じています。農協の集落営農アレルギーはかなり薄れてきたのではないのでしょうか。この点についてどううにお考えなのか、お聞きしたいと思います。

白石 集落営農の設立及び育成は、政策という外圧に対応せざるを得ないということで行っているケースが多いように感じます。最初は反発していましたが、どの農協も苦勞しながら対応していると思いますよ。

しかし、農協自らが集落営農の設立を推進しているケースもあります。農協を取り巻く環境はそれぞれ異なりますから、中には集落営農が組合員の役に立つといった農協もあるんですね。例えば、複合経営で有名な紫波に本所がある岩手中央農協がそうです。地域の方々が集落営農に取り組みたいということで、農協がその育成をサ

ポートしています。飯山に本所がある北信州みゆき農協も集落営農の育成に取り組んでいます。水管理や施肥は個別農家が担当する。機械作業は農家から出役してもらって集落営農で取り組む。収益はプールして後で配分する。このような特徴を持つ集落営農が管内に設立されました。労力不足に対応するには、このような組織が必要だったわけです。

7. 農協の各種計画策定にあたっての要点

吉岡 もう一点うかがいます。農協改革や組織再編を行うにあたって、農協は様々な計画を立てていますよね。改革の処方箋には具体性が求められますから、現状をしっかりと把握し、何ができるのか考察した上で計画を立てる必要があると思いますが、その際、何が重要なのか、お聞きしたいと思います。

白石 私は三カ年計画が最も大事だと思っています。ですから、農協に行くといつも3カ年計画を見せてもらっています。企画担当がしっかりとしている農協、それと有能なリーダーがいる農協は概して良い計画が策定されていますね。

和歌山県の紀南農協の営農振興計画書では、オンリーワンを目指

す条件不利地域と全国ブランドの梅などナンバーワンを目指す平坦地域に区分して具体的なプランニングと実践に取り組んでいます。

雲南農協では新規の果樹産地をつくるために果樹団地を建設中です。

また、計画を実践するにあたって、賦課金を上げざるを得ないところがあると思います。その際、「賦課金を上げて何をしてくれるんだ」といった説明を組合員から求められることになるでしょう。これにスムーズに対応するには、日頃から組合員とのコミュニケーションをとっておくのはもちろんのこと、組合員に当事者であるという自覚を持ってもらうことが必要だと思います。

吉岡 計画は大きく分けるとトップダウンまたはボトムアップのいずれかの手法で策定されると思うのですが、この手法に関してはどのような考えですか。

白石 組織にはいろいろな芽があるんですね。トップダウンは時間的余裕がないにも関わらず職員や組合員が気づいてない点、ボトムアップは職員や組合員に取り組み意欲がある場合に有効です。ですから、それをどう引き出して、育てて、発展させていくのかということが重要だと思います。

横浜農協の営農部長なのですが、この方は30年前に日大の芸術学

部卒業して農協に就職したんです。実家は酪農家です。この人が良いアイデアを沢山作り出すんですね。まずハマツ子ブランドを考案しました。それから、イトーヨーカドーの店内にインショップを設けました。トマトをはじめ主に野菜を出荷しているのですが、それに自分で書いた絵と一言メモが添えられています。つまり、ビジュアルで消費者にアピールしているんですね。それがとっても

効果があるんです。また、この部長は「一括販売」という出荷方法を編み出しました。組合員が農協に出荷するものはすべて引き受けるんです。しかし、その後の出荷先は異なります。良いものであればイトーヨーカドーのインショップへ出してくれます。悪いものはそれなりの所にしか出してくれません。こうした多様な流通チャンネルの確立が安定供給を実現しているんですね。横浜農協はこのようなアイデアを沢山生み出す人材を見出して、その人を育て上げてリーダーにしています。学ぶところが多いのではないかと思えますね。

8. 地域農業振興に果たす農協の役割と関係機関との連携

有田 地域農業振興あるいは地域づくりにJAも関わっているのですが、最近、JAが単独でそれを実践するのは難しくなってい

るように感じます。市町村や普及センターと連携しながら、それぞれが役割を果たしていかなければならないと思っています。ただ、連携と口で言うのは簡単ですが、実践するのはなかなか難しいですね。関係機関が連携しながら地域農業振興を果たしている優良事例がありましたら教えてください。

白石 先ほどからお話している雲南農協がそれに該当します。農協職員が役場に出向していますし、また農協と役場が同じ事務所に入居してワンフロアー化を果たしています。こうして自治体農政を農協がサポートしているんです。自治体がサポートしている事例は他にもあります。山形県の金山町では、役場と農協が連携して生産調整に積極的に関与しています。受け手のいない農地を団地化し、トマトやニラの生産を振興しているんです。それから、先ほど紹介した鳥取中央農協ですね。町有の遊休施設を農協が借りて、女性部のメンバーがそこでレストランを営業しています。

もちろん農協が支援されるケースもあります。鳥取県に東伯農協という有名な農協がありました。立花隆さんの『農協・巨大な挑戦』でも紹介されましたけれども、過剰投資が問題になって、バブル崩壊と同時に経営が悪化してしまいました。結局、鳥取中央農協に吸収合併されました。私が毎年訪問している北海道真狩村も、新

規作物の経営・技術指導に関しては普及員が担当していると聞いています。農協職員の指導は既存作物が中心だそうです。農協と普及センターが役割を分担しているんですね。

自治体とつまく連携している農協を紹介するとなれば、何回も話題にしている横浜農協となります。ここではグリーンベルト構想の一環として自治体の一〇〇%助成による基盤整備が行われました。これにより農地が維持され、農家が支障なく農業経営を行うことができるようになったんです。これが農協の安定経営にも波及しているんですね。

横浜の例に見るように基盤整備は重要です。群馬県には嬭恋村や昭和村といった屈指のキャベツ産地がありますが、これらの自治体には基盤整備をしっかりと行ってきたという共通点があります。その他の産地があまり元気がない理由は、基盤整備を十分に行っていないからではないでしょうか。県内には全国的に有名な甘楽富岡農協がありますが、管内の農地が十分に整備されているとは言い難いんです。ちょっと心配しています。

基盤整備は農業のファンダメンタルな部分を形成するものです。ですから、これは自治体主導で行って行かなければならないでしょう。一方で農協はソフト面も含め支援を行っていく必要があると思います。以上のように、各機関の役割分担が重要ですね。

大田原 皆さん、長時間に亘りありがとうございました。もっとお聞きしたいことがあるでしょうが時間切れです。いろいろな論点に関わって積極的にご質問やご意見を出していただき、それに対し白石先生にご丁寧にお答えいただきました。結果として、北海道の良い点だけでなく問題点もかなり浮き彫りになったのではないかと思います。

農協改革の必要性が指摘されていますが、何を改革すれば良いのかというフレームワークはまだ出来上がっていません。そのような状況の中で、北海道は独自の農協改革を実践していることとしています。井の中の蛙にならないで、都府県の様々な取り組みを教訓とする必要があるわけですが、今日の白石先生のご報告は、十分その参考になったのではないかと思います。また、北海道は農業に関する取り組みが都府県よりも先行していると言えます。これについてはこれから全国に発信していく意義があるでしょう。引き続き、農協に関する研究、そして議論が必要だということです。

白石先生、今日はどうもありがとうございました。

出席者

座長 太田原高昭 社団法人北海道地域農業研究所 所長
 報告者 白石 正彦 東京農業大学 国際食料情報学部 教授

<五十音順>

天野 徹 北海道 農政部農業経営局農業支援課主査（農業協同組合）
 荒川 聡 北海道農業協同組合中央会 経営対策部 経営企画課長
 有田 共秀 ホクレン農業協同組合連合会 役員室営農対策課 考査役
 大西 寿一 ホクレン農業協同組合連合会 役員室営農対策課 調査役
 工藤 康彦 北海道大学大学院 農学院 共生基盤学専攻
 栗原 伸二 北海道 農政部農業経営局農業支援課 主査（組合指導）
 黒澤不二男 社団法人 北海道地域農業研究所 常務理事
 桑原 達雄 ホクレン農業協同組合連合会 役員室 技監
 小柳 秀明 北海道信用農業協同組合連合会 農業融資部 部長代理
 佐々木正幸 社団法人 北海道地域農業研究所 総務部長
 佐野 卓見 ホクレン農業協同組合連合会 役員室営農対策課 考査役
 佐野 肇 ホクレン農業協同組合連合会 役員室 次長
 志賀 永一 北海道大学大学院 農学研究院 准教授
 清水池義治 北海道大学大学院 農学院共生基盤学専攻
 鈴木 啓徳 ホクレン農業協同組合連合会 役員室営農対策課 考査役
 須谷 貴司 北海道信用農業協同組合連合会 農業融資部 部長代理
 高橋 謙一 北海道信用農業協同組合連合会 農業融資部 次長
 高橋 寿法 全国共済農業協同組合連合会 北海道本部総務部 総務課長
 竹藪 雄二 全国共済農業協同組合連合会 北海道本部 総務部長
 寺口 隆広 北海道農業協同組合中央会 農業振興部
 奈良 孝一 社団法人 北海道地域農業研究所 研究部長
 朴 紅 北海道大学大学院 農学研究院 准教授
 橋本 正雄 北海道農業会議 事務局長代理
 広川 貴広 株式会社 北海道協同組合通信社 編集部 記者
 矢野 実 社団法人 北海道地域農業研究所 専務理事
 吉岡 徹 酪農学園大学 酪農学部 講師
 和田 好充 社団法人 北海道地域農業研究所 研究部 次長

事務局 井上 誠司 社団法人 北海道地域農業研究所 研究部 主任研究員

「農業に魅せられて」

...その4

養鶏農家（東川町）

新田 みゆき

この冬一番といわれるほど厳しく冷え込んだ朝、私たちが暮らす上川郡東川町の最低気温はマイナス二六度を下回りました。北海道生まれの私もこんな日は外に出るのがおっくうになりますが、大切な鶏たちが待つているのでグズグズしてはられません。「よし、やるぞ!」と気合を入れて玄関のドアを開けました。

外は、キーンと凍れた（しばれた）空気が澄みわたり、まっ白に雪化粧した田畑と蒼く澄んだ冬の空に、大雪山連峰の最高峰・旭岳が美しく映えます。厳しい寒さの中、どっしりとそびえ立つ旭岳は、春の息吹を静かに待つ田畑たちを見守っているようです。

伏流水のある暮らし

夫と娘は、昨年春から夫の研修先の東川町で生活していましたが、私と鶏たち、そして番犬二匹も、昨年九月末に引越しを済ませ、我が家の生活と生産の拠点をすべて東川町へと移すことができました。

ご存知の方が多いかもしれませんが、東川町は北海道内で唯一、上水道がない町です。旭岳に降った雪や雨をゆつくりと森林が吸収し、百年ほどの歳月を経た伏流水のめぐみを受け、飲料水や農業用水に使っているそうです。

地域の自然環境が長い年月をかけて育んだ豊富な水源のめぐみを受けて、生活したり、生産活動が出来たりすることは、私たちが東川町に移住したいと



新田みゆき(につた みゆき)さん

1964年 稚内市生まれ

1997年 稚内市上勇知にて養鶏業開始

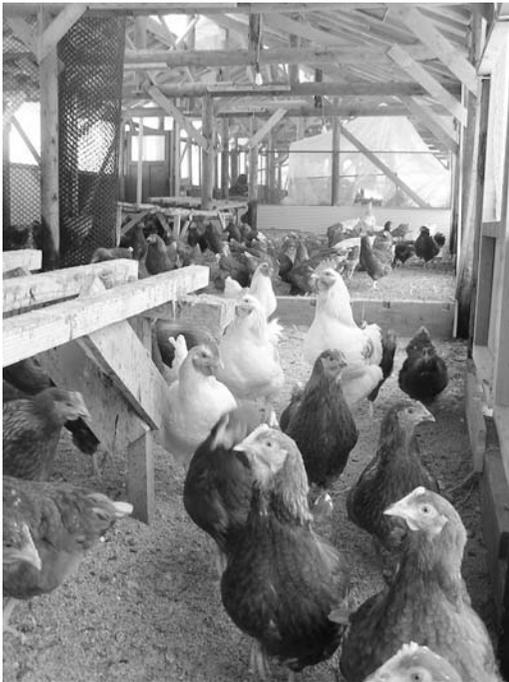
2007年9月 東川町に移転

夫 由 憲(42歳) 拓殖大学北海道短期
大学環境農学科新規
就農コース在学中

長男 美 春(高1)

長女 みのり(小6)

2 ha の農地を所有し、平飼いにて鶏250羽を
飼育



寒さに負けず、元気な我が家の鶏たち

思った理由のひとつでした。もちろん、人間のみにでなく、現在我が家で飼養している、大すう、中ビナ合わせて五〇〇羽を超える鶏たちにも、ミネラルたっぷりの東川の伏流水を与えています。

農業と水

私たちが豊かで良質な地下水

にめぐまれていた東川町で暮らしたいと思ったのは、数年前に友人に薦められて「地球白書」を読んだことがきっかけです。普段、なにげなく飲んだり使ったりしている水ですが、私たちが生きてゆくためにはなくてはならないものです。文化的な生活を営むための生活全般のみでなく、農業や工業などの



田植え前に除草作業をする佐竹さん

活動にも水は不可欠です。私たち人間のみでなく、すべての生き物にとって、水は代用のきかない大切な資源であるといわれています。

けれども、私にとって「水が

あること」はあまりにアタリマエで、その大切さを忘れてしまいがちでした。そして、「地球白書」を読む前の私は、水問題というと、「飲み水」の不足や水質の問題などのことだと思っ

ていました。

でも、本を読んで、そうしたことは問

題の一片であつて、地球の上では、水をめぐつてさまざまな問題や紛争が起きていることを知り、強い不安を感じました。人が飲み水として利用す

る水資源の量は、全体から見るとわずかですが、例えば、日本で一キロの米を生産するためにはその三六〇〇倍、鶏肉一キロを生産するためにはその四五〇〇倍の水が必要と試算されています。日本での水の総使用量のうち、農業用水は約三分の二を占めているそうです。

もちろん、作物の種類や耕作条件、その年の気象条件などによつて、必要な水量は違つてくるでしょう。でも、私たち人間が利用できるのは、地球上の淡水のごく一部（〇・〇二五％）ともいわれていて、限りがあり、無尽蔵ではないようです。

こうした農業と水の関係をあらわすデータは、私たちがアタリマエのように口にはしている食べものができるまでに、どれだけたくさんの水が必要かという

ことや、農業と環境のつながりの大切さを気づかせてくれたと思つていきます。

さて、地球規模の話はそろそろこの辺にして、私たちの足元である東川町での暮らしぶりに話題を戻します。

いろいろな生き物が暮らせる技術

拓殖大学北海道短期大学・新規就農コースに在学中の夫が、稲作の有機栽培技術を身につけたいと、昨年春から東川町で稲作を営む佐竹農園にお世話になつていきます。

佐竹さんは、幼いころアレルギー疾患のあつた息子さんの為に作った無農薬有機栽培の一枚の田んぼをきっかけに、東川町で二十余年にわたつて、お米の有機栽培を続けてこられた方で



合鴨農法の主役たち

す。今ではその息子さんと一緒に、約一〇町歩の水田を有機栽培と特別栽培で作っていらっしゃいます。

有機認証の水田以外もほとんど化学肥料を使わず、除草剤も

ヒエ対策のための一回のみ。また、除草剤による畦の除草も行わず、ハーブや在来の草をはやして害虫管理を行っているそうです。

夫は、除草剤は使わずに数反

の畑を作った経験はありま

すが、水田で

の無除草剤は

初めて。夫い

わく、「除草剤

を一回使用する

れば、特殊な

機械も、たく

さんの時間も

使わなくて済

むんや。ほん

でも、薬を使

わないことで

いろんな生き

物が暮らして

いける水田を作ろうと、二十年間も格闘している佐竹さんはカッコええで。有機栽培は、やっぱりおもしろいで」とのこと。一緒に作業をさせてもらい、その技術や作業に奥深さを感じて、ますます有機栽培に惹かれた様子でした。

アイガモ除草や深水管理、機

械、人力の除草でも残るヒエに

負けずに育った佐竹さんのお米

は、「噛めば噛むほど旨みがある」とか「ご飯だけでもおいし

い」と、私たちの友人知人からたくさん的好评を寄せられました。中には、「これを食べたら、もう、ほかのお米は食べられない」といって、佐竹さんの有機認証米に米チェンした友人もいます。

私たちが自分の水田を持つ日はまだまだ先になりそうですが、

佐竹農園で多くの生き物が暮らせる技術を学ばせてもらいながら、地域循環型の農業経営を目指してゆきたいと思っています。

小さな農業の生き残りをかけて

東川町へと移転して養鶏業を開始した我が家ですが、小さな舟で、飼料や資材の高騰の大波が押し寄せる海原へと出航したようなものです。

ものすごい航海（後悔ではありませんが、農業に魅せられた私たちが自ら選んだ道です。生き残りをかけて、一生懸命働いて、工夫して、勉強していかなくちゃ」と、今

いっそう気を引き締めています。

意気込みは一人前で鼻息は荒いけど、まだまだたよりない移住者の私たちを気にかけてくだ



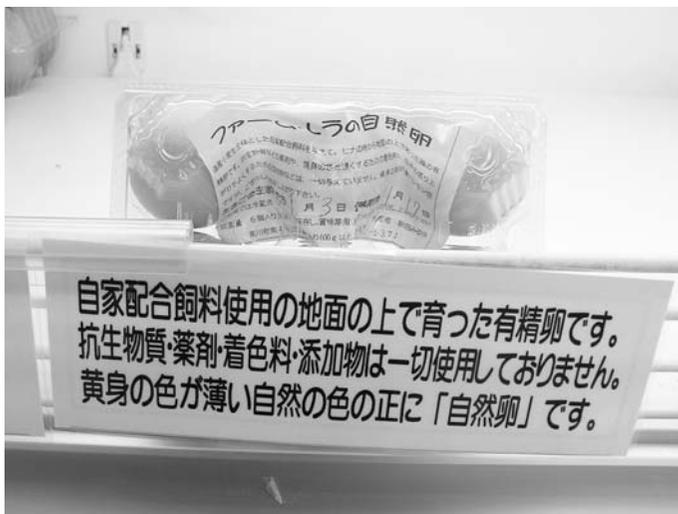
北の住まい設計社ショップの様子

さったのか、米糠やお米の等外品、そして野菜のハネ品など、生産過程の副産物を、「鶏の工サになるなら、取りにおいで」と声をかけてくれる農家さんが、一軒、また一軒と増えてきました。本当にありがたいことです。

そして、東川町での販売は、ホクレンショップひがしかわ店

さんと北の住まい設計社さんの店舗やカフェでも、我が家の卵をお取り扱いしてくださることになりました。

たくさんの方から寄せられた「おいしいよ」「安心して食べたよ」「がんばって」という温かなご声援を励みにしながら、これからも農業という道を、ゆっくりしっかりと歩いて行きたいです。



ホクレン東川店では生産情報が表示されている

いと思っています。

最後になりましたが、一年間、拙文にお付き合いいただきました方々に、心からお礼を申し上げます。ありがとうございました。

「手習い」イギリス文化論

第10回

～ イスラム体験 ～

北海道大学創成科学共同研究機構

明治乳業「乳の価値創造研究」寄附 研究部門 博士研究員

小林 国之

イギリス生活が始まってしばらくの間、ホームステイをしながら、朝八時過ぎから夕方三時過ぎまでエクセター大学にある語学学校に通い、その後研究室に顔を出す、という生活をしてきた。

ホームステイは、週二万円ほどの料金で朝食、夕食を食べさせてくれる。初めて訪れた国の風習や文化に馴染むためにもってこいの方法である。とまどうことも多かったが、今にして思えばとても貴重な経験であった。最初に誰もが共通して困惑することは、「ホームステイ」という暖かみのある言葉が想起させる家庭的印象との、ちよつとしたギャップである。エクセター大学の語学学校には、毎年日本の大学から約三十名の短期語学留学生が来る。彼らよりわずかばかりイギリス滞在歴の長かった私は、そのお世話役のようなものをやらせてもらっていたが、学生たちの多くは、滞在開始一週間ほどたつと、自分たちのホストファミリーへの不満（というよりもむしろ自分たちの先入観・期待との単なるギャップといった方が彼らには公平であろう）を口に始める。洗濯物を洗ってくれない。家族だけで夕食をして、自分には冷凍ピザが用意されている。そうした学生たちに、「ホームステイは彼らにとってビジネスだからね。」という私は、冷酷な人間に映ったに違いない。「それは冷たいということではない。節度を守った関係の上で、彼ら・彼

小林 国之（こばやし くにゆき）氏



- 1975年 北海道に生まれる
- 2003年3月 北海道大学大学院農学研究科博士課程
後期課程修了（博士（農学））
その後、北海道大学大学院農学研究科
研究員を経て
- 2004年4月 日本学術振興会特別研究員（酪農学園
大学酪農学部所属）
- 2007年4月 北海道大学創成科学共同研究機構
明治乳業「乳の価値創造研究」
寄附 研究部門 博士研究員

主な著書

『『農協と加工資本』～ジャガイモをめぐる攻防』
(株)日本評論社 2005年

女らは、異国から訪れた我々に、とても親切にしてくれるんだ」ということを説明しても、ホームシックになりかけている彼女・彼らにとっては、あまり慰めにはなっていないことが多かった。

確かにホストファミリーによっては、本当に冷たいところもある。ほとんど留守で一緒に過ごす時間をとってくれないところなどもあり、学生たちに同情せざるを得ない場合もある。しかし、一ヶ月ほどの留学を終えて、彼ら・彼女らが町を離れるときに、コーチステーションと呼ばれるバスターミナルまで朝早くに見送りに来てくれたホストファミリーと、時に涙を流して抱き合っている姿を見ると、深い温かい関係を築いてきたのだということがわかる。家族以外の人と初めて暮らした日々が、学生たちにもたらしたものは、決して語学力だけではないのであろう。

さて、達観したようなことを書き連ねているかという私も、ホームステイ当初は様々な困惑を抱えていた。語学留学の学生たちよりも若干大人の私は、その日々を意外と冷静に見ることができていたように思う。さて、今回書きたいことは、



ホームステイ先から大学へ向かう途中

ホームステイそのものではない。一つ屋根の下、ホストファミリーという世界中から若者が集まってくる、手近な国際的空間のなかで、私が感じたこと、なかでも英語という世界共通語というツールを学ぶために集まってきた人々を通じて見えてきた、自分が今まで知らなかった世界についてである。一言で言えば、ヨーロッパ（イギリス）を中心とした世界像、もつといえはイスラム圏への接近である。

今回はいつもと趣向を変えて、滞在当初毎日書いていた日記の一部を紹介しながら、私がいかにイスラム文化に出会い、接近し、困惑してきたのかを紹介したい。なお（）内の言葉は今回加えたものであるが、それ以外はほぼ当時書いた原文である。多少読み苦しい点は、臨場感ということでご容赦いただければ幸いである。ではご覧頂こう。

4月23日（土）

イギリス留学のまさに初日。一人の飛行機十一時間半はかなりつらい。一人の旅行者は意外というものと、今までは気がつかない発見。エクセターの駅に迎えにきてくれたホストファーザー（アンディ）につれられて、丘の上の一軒家に。子供四人の代わりにイエメン人と、西洋人（翌日トルコ人と判

明)に迎えられる。日曜日のお父さんの大工仕事で作られたよ
うな机ではパソコンも打てないので、ベッドでいま書いていま
す。窓からは町を見下ろすことができそうで、明日の朝が楽し
み。まずは時計を買わないと。

4月26日(火)

今日もイギリスの天気は雨。午後に一時晴れたが、すぐに大
降り。帰途も降られたが、家の直前から上がり夕食後にはす
すがしい天気になる。今日、初めてイギリスのサンデーロー
スを食べる。食材はダック。鶏肉よりも高いらしいが、とて
もまい。アミン(前述のイエメン人)は、イスラムの儀式に
乗っ取って処理された肉ではないと行って食べるのをやめる。
ELC(エクセター大学の語学学校の略称)では、授業が開始
された。自己紹介ばかりだったが、今後の困難が容易に予想さ
れる展開。世界中から集まってくる人々。それぞれの国では、
地方自治体職員や公務員、会社社長の息子などだが、ここで
肩書きは学生である。積極的に自分の意見を言わなければ、お
金を払っている意味がない。若い頃のナイーブな自分にはでき
なかつただろうと思う。この年で来てよかったのかも。雨に打
たれながらゴアテックスの裾から落ちるしずくを手でぬぐって
いると、イギリスにいるという実感が少しわいてきた。

4月28日(木)

夕食後、皆でテレビを見ていたら、ひょんなことから刑務所
の話になる。イエメンでは、窃盗罪は手首切りの刑。両手、両
足も切られるという話になる。さらには銃殺刑があり、被害者
の家族がそれを見守る。その話を聞いたリン(ホストマザー)
は顔色を変えた。死刑制度のないイギリス。人間は間違いを起
こす。もし冤罪で死刑になったらどうするのか、人を殺すこと
と死刑をすることは神様からみれば、人殺しに代わりはない。
死刑を執行することは神の代わりをすることになる。人間は決
してミスをしないう存在ではない。アミンは言葉の壁からか、リ
ンが本気で困惑していることに気がついていない様子で、「*It's
the man, bad man, lead*」。こんな内容のことをいつも通りの
大きな声で笑いながら繰り返した。アンディは「*calm down,
"L"*」といって自分部屋に消えた。取り残された私とアミンと
リン。同じことを繰り返すアミンに困惑の度合いを増した。つ
いに彼女は「*You upset me*」、「*Don't laugh*」、「*Don't upset me,
this is my house*」と行って、血相を変えて部屋を飛び出して
いった。残されたアミンは呆然としている。何が起きたのか、
自分が彼女を困惑させていたことに全く気がついていない。彼
にも悪気はないのだと思うが、言葉の壁、習慣の壁が些細なこ
とから大きな亀裂を生んだのであろう。明日からはどうなるの

か。関係の修復ははかられるのか。

ちなみに辞書で「upset」をひくと、狼狽する、心をかき乱す、むちゃくちゃにする、とある。リンは自分で「私は too kind, sensitive」といつていた。昨晩も、子供たちの食べている食事、野菜を食べずに添加物の入ったものばかり食べていることが心配で眠れなかったといっていた。そんなリンの心中は察してあまりある。

夕食はラム肉と野菜をゆでたものにブラウンアンドホワイトライス。アンディ曰く、自分は手料理に無縁、「ready to eat(出来合いの食品)」が家庭の味だという。昨日みたテレビ番組の子供を見ると、イギリスの健康、教育、様々な問題の根底に食事の問題があるのではと、誰もが思うであろう。

5月7日(土)

アミンが携帯電話を落とした。今週になってから、銀行カード、家の鍵に続きに第三弾らしい。動画も撮れる高性能。こちらで一四〇ポンドで購入したらしい。バスに乗っている間に落としたりしたいのだが、本人は隣に座っていたやつが落としたのを持って行ったと思っている。実際に携帯に電話をしてもスッチが切られている。アンディがバスのオフィスまで乗せていってくれて聞いてみたがなかった。携帯の契約書に緊急用の



庭で洗濯物を干す、長男のジョーダン

電話番号が書いてあるはずだからそれを見せて、とリンがいつでもアミンは、「this man, take it」を繰り返すのみ。手助けしようにもない。明日になったらボーダフォンに電話するといっているが。

彼は今まで六回もホームステイ先を変えているらしい。イエメンではポリスオフィスの高官らしいが、謎の多い男である。国には家が四軒あるらしい。リンは彼のパスポートを盗み見て、彼がポリスマンであることを突き止めているらしく、事あるごとに彼の正体を探ろうとしている。そのたびに彼は武威丸のように言葉がわからない振り。それにしてもアミンもリンもいい勝負である。ホームステイは基本的にホストの家だからプライバシーはないものと考えなければならないのか。実は人ごとではないと、ちょっとビビツたりして。

5月14日(土)

今日は一日雨。イギリスにはいろいろな雨を表す単語があるらしい。その中で覚えているもの。Scattered shower, drizzling, overcast, pouring rain, など。今日の雨はdrizzlingだろうか。そんな中、ダートムーア（以前にも紹介した国立公園）にバス旅行。昨日の夜中に具合が悪くなったせいかわからないが、いきなり酔っ。久しぶりのバスということもあると思うが、ヘッジの中を、枝を

こすりながら進むバス、時には立ち往生してバックしたり何だり。かなり参った。ついたところはどこかわからないが、石でできた橋。見学もそこにカフェにてホットチョコレート。その後、ウィッドコムという小さな観光の村に行き、そこでもコーヒー。その後、アジア、アラビア人は霧の中丘を登ったがトルコ人たちはみんな車の中で待機していた。私もジアド（ELCのクラスメイト）と一緒に上る。

彼、リビア人なのだが、日本にも居そうなやんちゃなタイプ。それにしても中東系は金持ちの息子が多い。オイルマネーか。この前の授業でホームパーティーを開くとしたら何人ぐらい呼ぶか、という質問に、サウジアラビアの男性は「百人以上」。立派なゲストハウスがあるらしい。自分たちの地下からわいて出てくる石油が今の世界を動かしていることを認識しながら、それを先進国という自分たちが世界の中心のように振る舞っている国々に売っている。たぶん彼らは当然の権利としてオイルマネーを考えているのであろう。いったいどんな世界観をしているのか、興味がある。

5月17日(火)

朝食時にヨーグルトを食べる私にリンが、「それは今食べるの。」と聞いてきた。そつだよと答えると、「イギリス人は朝は

ヨーグルトは食べない、高いからね。シリアルとブレッドだけ。」そのあと、ミカンを持ってダイニングを出ようとする私に、「それは学校に持って行くのか。」と。ホームステイの料金には昼食代は含まれていないのよ、といわれる。ヨーグルトが高い、といったのはそういうことなのか、と思う。ホームステイはビジネスなのだ。契約違反は許されないのである。食後のティー、クッキー、果物は自由に食べていいといっているのに、たった一個のミカンを持ってでようとすると僕に、それはだめだという。イギリス人の一面を垣間見たような気がして、すこし



アンディ手作りの部屋の机

困惑した。一度期に四人も学生を受け入れていたのは、同時に多数を受け入れた方が、一人ずつよりも合計の食費等が安くすむためなのだ。その分、新しく買った家のローンに充てることができるからである。そう、まさにホストファミリーは内職の一環なのだ。

昼食後は、授業でプレゼンテーションのまねごとをやった。オマーン人のサイフが張り切っていた。彼は最終プレゼンテーション（講義の最後で行う試験）でトップを取る、とここ最近張り切っていた。発表中は異常に汗をかいていたらしい。ディビッド（語学学校の教師）が私のプレゼンはなかなかよかった、と最後にいったのを聞いて、きつとかれは気分を害しただろうと思う。そんなことないでしょう、と思うかもしれないが、彼らの向上心は強烈である。明治維新直後に欧米に渡った日本人や大学に進学した学生たちは、自分たちの学んでいることがそのままこの国の将来を左右する、という意識を当然のように持っていたと、司馬遼太郎が「坂の上の雲」で書いている。今の学生とはずん分と違う気概である。どちらがいい、ということはないと思うが、中東からの学生の一部をみると、そうした気概を持っているように思われる。また、彼らはある意味でエリートであり、国の政治、経済の中心にいる人々の子息が多い。当然親の跡を継いで国を左右する人物になると思ってい

るのであろう。

授業後に久々にシャヒン（私と初日から滞在することになったトルコ人）と帰る。最近授業内容がわからない、と怒っていた彼に、チューターに相談に行けばいい、とアドバイスしたが、今日早速行ったらしい。明日の朝にもう少し詳しく話をするそうだが、ずいぶんと明るい顔になっていた。そんな彼にさらなる吉報が。ビザの申請をしていた奥さんの許可があり、急転直下今週の日曜日に娘さんとともに渡英するそうだ。家も決まっていらないのにどうするのか、といったら、二、三日はアムステルダムに滞在して、それまでに家を見つければいいのだそう。家の中にもう一人の女性、リンが非常にいやがっている展開に短い期間だがなりそうである。彼女のストレスはますます増加するだろう。

6月7日（火）

大学からの帰路にセントトーマス近くの電気屋にわざわざ買い物に寄ったのに十七時半で閉店。ところで、リビアという国に関して、日本に「未知の国」、「テロリストの国」というアメリカのプロパガンダしか聞こえてこないが、どうやらイスラムの国、というよりも北アフリカでヨーロッパにかなり近い国のようだ。彼らもアラビア語が母国語だが、かなりな

まっているらしく、アラビックの人でもわからないらしい。クラスメイトのジアドをはじめ、彼らはテレビゲームにコカコーラ、ピザ、たばこ、酒が好き。イスラムの中でもかなりルーズな様だ。同じくアラビア半島からみた遠方に位置するイスラムの国であるバングラディッシュなどよりも戒律が緩いようだ。世界の見方が変わる。アメリカを経由してヨーロッパ、中東をみると、ヨーロッパからみるとではずいぶん印象が違ってくる。座標軸の転移。

6月8日（水）

昨日から二日続けての晴れ。気温は結構低いが、さすがしい天気。Peasant。掃除機のフィルターを買おうべくシティーセンターをうろつくが見つからず（ヨドバシがないんだもの）。夕食は、スパイシーチキンとジャガイモ、肉じゃが風のもの。窓の外をふと見ると、熱気球、airballoonといつらしい。子供たちに教えたなら、反応が薄かった。子供がつれないよね。長男のジョーダンだけが気を遣ってありがとう、っていつてくれました。

ところで、リビア人は酒を飲んだらとまらない、あげくにはweed（マリファナのこと）も吸うぞ、とジアドがいつていた。この二日ほど、リビア人が興味深い。最近家に来たリビア人の

オマー。彼はほとんど英語がわからないらしい。今、庭で一人たばこを吸ってます。あれ、マリファナかしらん。夕日の中、熱気球が丘の向こうに消えていきます。すごくいい眺めなんだろうな。あつ、みえなくなった。

6月14日(火)

今日は十八時半までE.L.C.にいて、管理人においだされた。家に帰ると今日もロシアとトルコの大騒ぎ。トルコ人の部屋にロシアの少女たちが出入りしていることに対してリンは何か



アンディとリン。新しく購入した家のワールドにおいているキャラバンのなかで

あつたら大変、と責任を感じているようだ。ロシアの少女は今日の夕食の美味しいラザニアも食べない。ロシア人も夜九時半頃に帰ってきて、やはり何も食べていないようだ。知らない、言葉もあまり通じない、年齢も違う人間が一つ屋根の下に暮らしている、考えれば問題がない方がおかしいくらい奇異な環境である。

6月18日(土)

曇り空のもと八時に目覚める。シャワーを浴びて下に降りるとリンがストーブを付けて新聞を読んでいた。ロンドンに行くカタリーナ(ロシア人の少女)を朝六時に送りにいこうとしたら、すでに出発したあとだったらしい。オマーは昨日の夜帰ってこなかったようだ。昼食はアンディがチーズたっぷりのオムレツを作ってくれた。なんか、こういうのはすごくひさしぶりな気がする。宿題を二時間ほどやっているトルコ人が一人でサッカーをしてきた、といって帰宅。食後にひげを怪しく剃ってきて、「どつ、いいか」と聞いてきた。みんな「いいよ、いいよ」といっていた。彼、二年前にもロンドンに留学していて、親は英語がしゃべれるらしい。またまた金持ちの子供だろう。ロンドンに近いうちにまた移りたいといっていた。

オマーは今夜も帰らないのだろうか。どうやら国からお金を

もらって留学しているらしく、学校に行っていないことが国にばれたらしい。大使館から呼び出しがかかって強制送還される可能性もあるらしい。時間とお金の無駄。やる気ない人を無理矢理つれてくることのないのに。昨日は徐々に弱い偏頭痛、今日は朝から背中が神経痛。一週間、疲れたのだろうか。

6月26日(日)

午後からは家に戻って、新聞を読んだり、昼寝をしたりして過ごす。それにしても、日中に眠くなるのはなんだろうか。夕食は、数日前もでた中華料理風の麺料理。ビーフンも試してみたいとリン。昼食は、はじめての自炊で卵炒めみたいなもの。夕食後も、外が気持ちよかったのでガーデンで紅茶を飲んで過ごす。そのうちオマーが帰ってきた。昨日の夜は一人でウォッカを二リットル飲んでシティーセンターのベンチで寝ていたらしい。帰ってきてからも部屋からボトルを持ってきて飲んでいった。酔っぱらってご機嫌の様子。一年間語学を勉強した後、二年間のマスターコースをリバプールの大学で受けるそうだ。父親の経営する銀行を継ぐ予定らしい。

彼の家族は全員トヨタのランドクルーザーを持っていて、週末になるとみんなで動物の狩りに出かける。夜にサーチライトで照らし出されたウサギかガゼルみたいなのをハンティングし

て、サハラ砂漠で肉を焼いて歌を歌うのだそうだ。満天の星空。全く想像がつかないが一度体験してみたい。なんかロマンティック(アラビアのロレンスか)。一キロ先のウサギも一発だけ、と自慢していたが、リンが聞いたらどう思うかしら。中東、北アフリカ、一度いつてみたい。少し彼と話してみたが、決して悪いやつじゃない。明日から語学学校を変える、といていた。「もう酒は飲まない、勉強だ、勉強だ」といいながらウォッカの瓶をぐびぐびと。イスラム、前にも一度思ったが、彼らはきつと酒がものすごく強い人たちで、それを知っていたアラアが、このままではアラビア人は酒で身を滅ぼすと思い、禁酒したに違いない。こんなに酒好きな人々を酒から遠ざけておく信仰心、戒律を守らなければならない、という空気。これこそがまさに宗教なのだ、妙に感心した。

来週にもう一人のリビア人が家に来るので俺は出て行かないといけない(家には語学の関係で基本的には同じ国から二人以上は受け入れない。このあたりのコーディネーターは語学学校がおこなっている)。「家を探さないと。」と新聞を見て探している姿に、何だか同情した。私も人がいい。

6月28日(火)

食後、オマーが買ってきたバドワイザーを二人で飲む。夜に、



長女ローレンと三男のタイラー。休日の1コマ

彼が香木をもってきた。立ち上る煙に鳴り出す警報機。おどろいておりてくるアンデイ。におい的には嫌いじゃない、が、アンデイにしてみればいったい何してくれてんのよ、という感じだろう。オマー、明日から一泊でロンドンに行ってくるらしい。とても厳しいお父さんがロンドンの銀行にお金を振り込んでく

れるのでそれを引き落としに行くといっていた。どこでも引き落とせると思うが、何か秘密があるようだ。彼のお父さん、三年間リビアには帰ってくるなよ、と釘を刺しているらしい。でも彼、チュニジア人の彼女に三ヶ月後にイギリスにくるように入ったらしい。で、彼女も来るらしい。親の心子知らず。オマーの所行、父親知らずである。

7月1日（金）

帰宅後に、アンデイの妹の家に、私が購入予定の車を見に行く。途中ジエームスオーウェンで新しいトルコ人の生徒をひろうといわれた。ついてみたら、待っていたのはムラット、ELCで同じクラスだった。驚いたが、なかなかいいやつなのでおもしろくなりそう。彼はトルコの地方役人、二十五歳。十月上旬まで滞在する予定らしい。

車を見に行ったら、なかなかいい車。室内はちょっと汚かったが、子供も乗っていたということではしょうがない。タイヤは新しく、MOTも十ヶ月ある。税金は十月らしいが、七万マイル。問題ないだろう。銀色でシーディーチェンジャーについて、サンルーフも。車内に忘れたリュックサックを夜に持ってきてくれた彼。車を手放すので最後のドライブ、ということできたらしい。彼は子供ができたので大きな車（三菱ス

ペースギア?)に乗り換えたが、この車に愛着があるらしい。車を手放すときには声をかけて、といつていた。それだけ愛されていた車だから、きっと大丈夫だろう、と期待を込めて。

ところでムラットはイギリスの料理が全くだめらしい。肉が食べられなくて、野菜と魚のみ。ちよっとトラブルの予感もある。あと、ムハマド(前述のオマーの後にやってきたリビア人である)、彼、実は酒好き、盛り場好きの十七歳。こちらも困ったちゃんの香りである。昨日は家族の手前、酒嫌いだ、と嘘をついていたらしい。まず、嘘をつく時点で問題でしょ。夜十時頃、三人で家の周りを散策。ムハマドの英語に我々二人の英語が崩されそうである。夕食はegyptianのラザニア。おいしかった。

7月4日(月)

学校のない初日(先週で語学学校は終了)。今日は誰も部屋にいなかったの、一日中一人。大学の食堂も閉まっているようなので、明日も昼食を買っていかない。麓のお店で一・九九ポンドのサンドイッチ。ムラットが夕食後に外に買い物に行き帰ってきたから、二時間ほど話をする。いい勉強になる。彼の職業はディストリクトガバナー(地方の知事が長官のような職か)。七千人の受験者のなかから試験、面接を経て選ばれ

るのは五十人。一年間の海外研修を含む三年間の研修期間を経て、地方に派遣されたときには、家と運転手付きの車が用意されているらしい。ドイツに五人、フランスに五人、残りはイギリスに來ているらしい。イスラエルとの関係や、アメリカに対する考えなど、いろいろな話をする。ユーラシア大陸の端っこからみているのとは違いずいぶんと視野が広がる。トルコ、一度いつてみたい。コカコーラとペプシがともにユダヤ人の会社だということなどの話。週末のLive8の余波がテレビなどでいろいろ見られている。週末にはG8がある。それへの抗議としてエディンバラに人々が集まって警察といざこざを起していた。

7月6日(水)

夕食のチキンローストを食べた後にムラットからイスラムの講義を受ける。イスラム教はすべて来世のために生きるのだ。イスラム教が、ユダヤ、キリスト教ときて最後にできた宗教だから、一番いいんだ、という素朴な理論。でもだからこそ前の二つの宗教の存在を認めることができる、という度量。

7月7日(木)

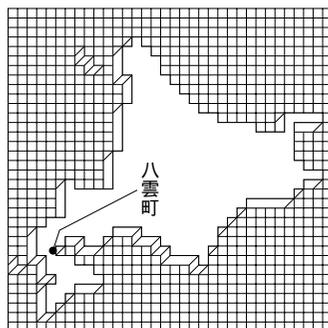
昨日少し早く寝たせいか、今日は体調がよかった。午前中か



左・サウジアラビアのアジズと右・リビアのジアド。ダートムーアへのバス旅行で立ち寄った古城にて

からお昼過ぎまで、順調に読書。ついに論文一つ読んだ。昼に買ったインスタントコーヒーを飲んでいたら、とも（日本人のスポーツ科学を勉強している大学院生）から電話。夕食は鯖をたべた。美味しかったが、ご飯がほしくなった。ロンドンで爆破テロ。四十人近くの死者が出ているらしい。イスラム教徒の同居人たちはテロリズムスリムという構図に嫌気がさしているらしい。そりゃそうだが。アメリカのテロもユダヤ人の仕業だと思っているらしい。9/11にかぎって世界貿易センタービルに勤務しているユダヤ人が全員休んだ、ということはイスラムの世界ではよく知られているらしい。

以上、日記からイスラムに関わる人たちが登場する場面だけを拾い集めてみた。改めて読み直してみると、結構中身の濃い日々を送っていたものだ和我ながら感心する。残念ながら、私の北アフリカ、トルコ旅行の願いは果たされなかった。アラビアのロレンスになるのは、まだ先の楽しみにとっておこう。あつて世界を支配した大英帝国で出会った彼らは、今も私に強烈な印象を残し、世界の見方を少しだけ変えてくれたのだ。



あのマチ
このムラ
・地域おこし活躍中

八雲町の事例

No.51

八雲町の歴史と農業概況

八雲町は、平成十七年熊石町との合併により、渡島半島のほぼ中央部を占める、日本で唯一日本海と太平洋に接している九五六平方キロメートルの広大な面積を有する町、東は内浦湾に注ぐ遊楽部川、野田生川、西は日本海に注ぐ相沼内川、見市川が流れ典型的な櫛の歯状中山間地帯を構成している。八雲の歴

史は古く、明治十一年旧尾張徳川藩士の入植に端を発した道内でも最も古い開拓の歴史を有する地域の一つである。

開拓の当初は馬鈴薯の生産が主体で町内圃場の七〇％に作付された。八雲で生産される「でんぶん」が国内市場の相場を左右するまでになったが、大正初期に連作による地力の低下と価格の暴落が重なり壊滅的なダメージを受けた。

再生の手段として大正期の半

ばから酪農を選択し、以来半世紀にわたる努力の結果、今日の酪農郷が築きあげられた。駒ヶ岳の噴火による火山性土壌と「ヤマセ」や頻繁に発生する海霧の影響から作付作物は限定され、米も「もち米」が主体であった。

現在は種芋の生産や野菜（軟白ネギ、ダイコン、カボチャ、インゲン）、花卉（カスミソウ、スターチス）の生産に力を入れている。

乳用牛飼養状況の推移

区分	H7	H12	H15	H17
飼養戸数	220 100.0%	171 77.7%	160 72.7%	150 68.2%
飼養頭数	12,500 100.0%	10,619 85.0%	11,400 91.2%	10,300 82.4%
出荷乳量	44,900 100.0%	44,587 99.3%	43,338 96.5%	42,446 94.5%

資料：農林水産統計

新規就農の状況

区分	H13	H14	H15	H16	H17
Uターン	4	3	1	4	1
学卒	2	1	3	4	1
新規参入	1				

資料：渡島農業改良普及センター北部支所

町の基幹である酪農は平成十七年で二五〇戸で一〇、三〇〇頭を飼養、平均頭数は六九頭になるが、五〇〜七〇頭飼養が全体の四〇%を占め経営規模は決して大きくはない。牧草及び青刈トウモロコシの面積が多く、飼料自給率の高いことが八雲酪農経営の特徴となっている。

農家戸数の減少

農家戸数は平成十二年から十七年の五年間を見ても二八二戸から二三五戸へと四七戸減少しており、農畜産物価格の低迷と高齢化の進行を考えると、この傾向は今後も続く予測される。しかし、その離農跡地を吸収して規模拡大を図ろうとする農家は少なく、今後条件不利地区から始まる農地の遊休化が懸念される。

新規就農

平成十二年に新規就農促進を目的に「八雲町新規就農支援資金貸付条例」を制定し、二〇〇万円を貸し付け、五年間営農を継続するなら償還免除するなど制度を策定したが、なかなか就農希望者が現れなかった。し

かし現在、離農予定者の

ところで研修して後継するという形で、酪農と肉牛経営農家で二組の研修生が頑張っている。新規就農者が無理なくスムーズに就農までこぎ着けるシステムとして、実際に今まで営農してきた農家に諸々の営農技術を教えてもらうことが、その後自分のオリジナルな経営に転換するとしても、現地の実情を吸収したり効果的に営農技術を習得するという意味でも有効と思われる。

自給飼料に立脚した収益性の高い酪農経営

当地の酪農経営は根釧・天北がフリーストール、ミルクングパーラー導入による大型化、効



ユーラップ岳を望む牧場風景

率化に進む中で、極力設備投資を抑えて、健全経営を指向してきた。そのため設備は老朽化し労働条件も必ずしも良いとは言えないがその地区にあった経営、そして乳製品の加工販売に力を入れる経営も存在している。最近の輸入飼料の高騰に最も耐力のあるのは、規模は小さくと

も良質粗飼料を基盤とした放牧型の経営ではないかと考えられる。

小栗隆さん

小栗さんは夫婦で中標津町の三友農場を見学し、彼の放牧によるゆとり酪農に心酔して平成九年から放牧主体の飼養体系に切り替えた。現在家族労働二・



小栗さんご夫妻とおいしいチーズ

女性グループの活動

グループ名	会員数
八雲漬け物研究グループ	15
八雲ハンドメイドの会	15
ユースラップハーブの会	16
東野ほっぺの会	6
八雲町野菜グループ連絡協議会	21
ファームネット八雲	6

資料：渡島農業改良普及センター北部支所

五人で経産牛四五頭、育成牛十頭を年間二〇〇日放牧とローラップサイレージを組み合わせ、長年使い込んだ機械を修理して丁寧に通うことで牧草のTDN/kgあたり生産費は二九円牛乳の生産コストは五〇円/kgを実現している。しかし経営を簡素化することだけでなく自動自給機導入により生まれた「ゆとり」を利用して平成七年から手作り、無添加、無調整をポリシーに十種類の様々なチーズを

年間生産している。

自宅での販売の他、農協やレストランでの販売も行っているが、近隣に三カ所のチーズ工房があり、そこを巡って試食しながらお気に入りのチーズを選ぶような、魅力ある観光スポットになってほしいという夢を持っている。自家製のチーズを試食したが、「同じ自分の家の牛乳を使っても夏と冬では色も味も違う、どちらが美味しいと言っているのではなく各々の特徴を是非味わってほしい」という小栗夫人の思いを反映した、塩分控えめで原料の本来の味を楽しめるチーズであった。

近代的な設備投資と経営規模拡大によるコスト削減だけでなく、地域の条件を反映したこうした経営がモデルとなることは、酪農にも多様な経営形態が存立できることを証明した。その結果小栗牧場は全国の中山間で応用可能な「次世代に継承できる

持続可能な酪農経営」モデルとして平成十九年度農林水産祭天皇賞を受賞した。その経営を公開することで若手経営者を育てたいと語る小栗さんは地域農業のリーダーであり後継者育成の役割を担う「北海道指導農業主」の一人でもある。

梶田とき子さん

八雲町内を山崎から野田生まで国道に平行して走る「ミルクロード」は遠く駒ヶ岳を見ながら内浦湾を巡るすばらしい景色のワインディングロードで、その一角に無人の野菜直売所とドライフラワーの看板が目印の梶田さんの工房がある。

女性の「北海道指導農業主」梶田さんは「ハーブを暮らしの中に」をテーマに仲間八人とフロムネイチャーファームというドライフラワー工房を立ち上げ



梶田さんの作品展示コーナー

自前で自然乾燥の工房と研修施設を作ってしまった。一千万円ほどの資金は町の助成やし資金そして家族の協力で調達し、「まあ、定年後の道楽と思えば、他に贅沢しなければ、死ぬまでには返せるでしょう」と屈託がない。施設は三〇人ほどが一度に研修できる研修室兼乾燥ルームと売店からなり、とても個人の施設とは思えない。

自分の作品を販売すると言うよりも、この施設を核として交流の輪が広がればよいという考えで、原材料の花はみんなの分をまとめて購入し、多くの作品は近隣農家の奥さんの委託作品である。

梶田さんと同じような活動をしている組織が多数存在しており、これらを結びあわせ、さらに小栗さんたちのチーズ工房や、町内に点在するレストランを結びネットワークが機能すると、一日八雲で遊ぼうという観光客を充分呼び込める潜在力があると感じさせられた。ただし、国道が市街地を迂回していることから、人通りが少なく目的の農場を探すのに一苦労した。統一した案内板と拠点としての観光案内センターが是非ほしい。そこに内浦湾産直の海産物も合わせた物産の直売所があればより八雲観光を楽しむことができる。

三沢公雄さん

若者の考えも聞きたいと思つて、地域酪農青協の役員をして三沢さんを取材した。ちょうど朝の搾乳の終わりかけで、集乳のタンクローリーが来たり忙しい時間帯であったが、さわやかな夫婦が暖かく歓迎してくれた。奥さんは出産、育児で二年間休業していたが最近仕事に復帰。非農家からの嫁入りで最初は疲れてとまどつたが、今は夫と共に生き生きと乳搾りに励んでいる。三代目にあたる公雄さんは後継後、規模拡大を含め自分が考えた経営形態への転換を望んで焦つた時期もあつたが、今は子供たちの将来を見据えて堅実に施設の更新を計画している。酪青協の活動にも熱心で地域の若者たちが協力して、活性化に繋がりたいとの意欲を持っている。



搾乳作業中の三沢さん夫妻

三沢牧場の帰りユーラップ川に架かる橋の上から駒ヶ岳でも写そうと車を停めると、川の中には鮭が群れていた。川岸には産卵を終えた鮭が累々と横たわっていたが、カラスや鳶も食べ飽きたのかただ柏の樹に留まっただけ、豊かな自然と暖かな住民にふれて是非また来てみたいと思わせる取材だった。「春の若葉の季節もいよいよ！」という奥さんの声はまだ頭の片

隅に残っている。

北海道における中小規模集約酪農の進路

今回の取材の後八雲の農業に関連した資料を探してみると平成八年に当研究所が約一年をかけて行った八雲町のアンケートと現地調査の報告書「北海道における中小規模集約酪農の進路」を見つけた。その中で当時の北海道立中央農業試験場長尾部長や北海道大学坂下教授が①

八雲町は中小規模酪農経営が機能の主流を占め、複合作物である種子ばれいしよや個体販売が経営を支えている、②酪農家の意向の特徴は現状の経営スタイルを維持しながら、増産もしくは規模拡大を指向している、③しかし酪農部門の収益性分析から頭数規模や個体乳量と収益性が相関しておらず、酪農所得を

補充するはずの種子ばれいしよや、個体販売を含めていくつかの問題が収益性を阻害している。

そして改善のテーマとして「経営効率改善のために、今後の経営方向の見直し」を提言している。経営規模拡大に「行け、行けどんどん」の時期にこの提案をしたことに、手前味噌ながら感心すると同時に、現在の厳しい情勢を乗り切る最善の提案だったとの確信をもった。

まとめ

今回取材した三農家に共通しているのは、いずれも家族労働の範疇でゆとりを持った酪農経営に取り組んでいること。そのゆとりを元に様々なテーマに意欲的に取り組んでいること。またその取り組みが地域活性化の芽となって周辺に良い影響を与えていること。それぞれが八雲

を愛し、地域活性化に貢献したい思っていることが印象に残った。

しかし八雲町は、大分県の湯布院に負けない景観や温泉を含め道内外から人を呼び込めるだけの要素をもちながら、個々の活動が点からやっとなりつつという段階にある。これを

面として八雲町内全体に広げるには関係農業者の取組みや行政を始め、普及センターの濃密な支援の一層の強化が求められていると感じた。

最後に宣伝ではないが、町では個人から寄贈された土地を宅地として整備して、すぐに他の人に転売しないなどごく緩やかな条件で移住希望者に平均二五〇坪の

土地を無償譲渡している。希望者は気軽に役場まで相談するよう薦めたい。

(社)北海道地域農業研究所
特別研究員 斉藤 勝雄



ユーラップ川の豊かな流れ



研究会・研修会等への

報告者・講師の派遣

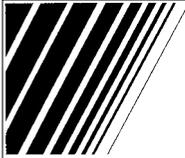
(平成十九年十月～十二月)

- 「地域開発計画管理Ⅱ」
主催 (独法)国際協力機構北海道支所(札幌)
- とき 平成19年10月10日
- テーマ 農協の仕組みと制度
- 講義 奈良 孝一
(当研究所・研究部長)
- 「専修大学北海道短期大学創立40年記念シンポジウム」
主催 専修大学北海道短期大学
- とき 平成19年10月13日
- テーマ 飽食と飢餓 北海道農業を考える
- 講演 藤田 久雄
(当研究所・理事長)

- 「北海学園大学市民講座」
主催 北海学園大学
- とき 平成19年10月20日
- テーマ 道産米の歴史
- 講演 太田原高昭
(当研究所・所長)
- 「平成19年度根釧農試酪農フォーラム」
主催 道立根釧農業試験場
- とき 平成19年11月1日
- テーマ 近年の情勢変化から北海道酪農の進路を考える
- 講演 黒澤不二男
(当研究所・常務)
- 「わが村は美しく 北海道」運動宗谷地方セミナー
主催 北海道開発局稚内開発建設部
- とき 平成19年11月8日
- テーマ 「わが村」で出会った魅力ある人々
- 講演 黒澤不二男
(当研究所・常務)
- 「十勝畑作研究会設立大会セミナー」
主催 十勝畑作研究会・十勝農協連
- とき 平成19年11月16日
- テーマ 近年の情勢変化の中から十勝畑作農業を考える

- 講演 黒澤不二男
(当研究所・常務)
- 「わが村は美しく運動講演会」
主催 北海道開発局帯広開発建設部
- とき 平成19年11月22日
- テーマ 特産物を活かした地域振興
- 講演 太田原高昭
(当研究所・所長)
- 「平成19年度経営改善研修会」
主催 芦別経営改善支援センター
- とき 平成19年11月26日
- テーマ みんなで考えみんなで参加 地域再生と活性化
- 話題提供 黒澤不二男
(当研究所・常務)
- 「北海道立北見農業試験場100周年記念講演会」
主催 北海道立北見農業試験場 北海学園大学
- とき 平成19年11月30日
- テーマ オホーツク農業の課題と展望
- 講演 太田原高昭
(当研究所・所長)

- 「ニューリーダー養成研修」
主催 北海道立農業大学校
- とき 平成19年12月5日
- テーマ 経営実態調査の重要性
- 講義 奈良 孝一
(当研究所・研究部長)
- 「平成19年度釧路生協会」
主催 生活協同組合コープ さつぼろ
- とき 平成19年12月6日
- テーマ 協同組合としての生協の可能性
- 講演 太田原高昭
(当研究所・所長)
- 「平成19年度幕別農村アカデミー」
主催 幕別農業振興公社
- とき 平成19年12月11日
- テーマ 畑作をめぐる情勢変化と幕別農業の方向
- 講義 黒澤不二男
(当研究所・常務)
- 「コープさつぼろ農業賞フォーラム」
主催 生活協同組合コープ さつぼろ
- とき 平成19年12月11日
- テーマ 食の安全・安心と生協交流
- コーディネーター 太田原高昭
(当研究所・所長)



DATA FILE

関連事項 / DATA

東京農業大学
〒156 8502
東京都世田谷区桜丘 1 - 1 - 1
☎ 03 5477 2352
FAX 03 5477 2621

新函館農業協同組合 八雲基幹支店
〒049 3112
北海道八雲町末広町161
☎ 0137 62 2121
FAX 0137 63 4324

八雲町
〒049 3192
北海道八雲町住初町138
☎ 0137 62 2111
FAX 0137 62 2120

渡島農業改良普及センター渡島北部支所
〒049 3106
北海道八雲町富士見町130
☎ 0137 62 2496
FAX 0137 62 2748

(社)北海道地域農業研究所
〒060 0004
札幌市中央区北 4 条西 7 丁目 1
☎ 011 281 2566
FAX 011 281 2707
HP: <http://www.chiikinouken.or.jp>

「平成19年度函館生協会」
主催 生活協同組合コープ
さつぼろ
とき 平成19年12月11日
テーマ 協同組合としての生協
の可能性
講演 太田原高昭
(当研究所・所長)
「平成19年度旭川生協会」
主催 生活協同組合コープ
さつぼろ
とき 平成19年12月13日

テーマ 協同組合としての生協
の可能性
講演 太田原高昭
(当研究所・所長)



編集後記

●アメリカのサブプライム危機による世界同時株安・原油高・小麦・トウモロコシ等穀物価格の上昇に伴う食料品・日用品の値上がり等急激な物価上昇により庶民の生活は急速に悪化しています。
いま争点となっているガソリン税問題、延長期間・税率・一

般財源化も含めて国会で与野党の徹底議論が必要ですが、四月以降国民に無用な混乱を与える事だけは絶対に回避してもらいたいものです。

●二年半十回にわたり連載され好評を博してきた「手習い」イギリス文化論も最終回を迎えました。筆者の小林国之さんに感謝するとともに今後のご活躍をご期待いたします。

また、農村体験をもとに執筆をいただいた新田みゆきさんの「農業に魅せられて」も最終回となりました。

今後機会があれば投稿をお願いいたします。

前号第67号に誤記がありましたのでお詫びし訂正いたします。

観察 2 ページ上段 10 行目
20 ー 10
3 ページ上段 7 行目
20 ー 10
特集 25 ページ上段 17 行目
1万2,000千円

1万2,000千円

エーコープ
くみあい 高度化成肥料

くみあい 粒状配合(BB)肥料



稔りある大地とともに

ホクレン肥料株式会社

代表取締役社長 藤田 久雄

札幌市中央区北4条西1丁目1番地(北農ビル18F)

TEL 代表 (011) 222-2444
FAX (011) 232-3597



FUJI PRINT Co.,Ltd.

当社はおお客様の夢を実現するために、
創造力と技術力を常に前進させ続けています。
お客様の夢を当社にお聞かせ下さい。
少しでも夢が現実のものになっていくように
我々は努力します。



デザインから印刷・製本まで
一貫した社内体制で、
それぞれのニーズにお応えします

富士プリントはさまざまな印刷に対応

営業品目

- 定期刊行物 ● 商業印刷物
- 頁物印刷物 ● 記録印刷物
- フォーム印刷物 ● 情報処理加工

附帯サービス

煩わしい印刷物の梱包・発送作業を当社がお客様に代わって致します。

- 封筒入れ ● タックシール貼り
- 仕分作業
- 宅配便・郵便局・コンテナ手配 等

当社は2001年9月3日付で品質マネジメントシステムの国際規格であるISO9001/2000年版の認証を取得しました



富士プリント株式会社

〒064-0916

札幌市中央区南16条西9丁目

TEL.011-531-4711

FAX.011-530-2549

URL <http://www.fujiprint.co.jp/>

農家の皆さんの草地更新等 圃場整備のお手伝いをします。

公社 NEW リフレッシュ事業

施工メニュー

- 標準施工は、耕起～土壌改良資材散布～砕土～施肥・播種～鎮圧です。
- 標準施工に、カッティングドレーン工、有材心土改良耕、堆肥散布など追加施工も可能です。

土壌改良資材・肥料・牧草種子

- 投入資材は、農家の皆さんで用意してください。
- 投入量は、自由に設定できます。
- 品種や組合せも、自由に設定できます。

補助事業との違い

- 土壌改良資材、肥料、種子等は、施工圃場で受け取ります。
- 事業量は、既存の地番図や航空写真等を活用した現地調査で確定します。
- 発芽不良などの手直し工事は、別途工事として施工費がかかります。

事業メニューと施工単価(税込)

メニュー区分		ha当たり施工費	備考
I 単年度施工	A 春季施工 (牧草収穫前播種)	圃場条件：普通	<ul style="list-style-type: none"> ●圃場条件：普通 砕土2回掛けを標準とする。 ●圃場条件：不良 (石礫地・重粘土壌・傾斜地等) 砕土3回掛けを標準とする。
		圃場条件：不良	
	B 夏季施工 (牧草収穫後播種)	圃場条件：普通	
		圃場条件：不良	
II 2か年分割施工	C 秋季施工 (2か年分割施工)	圃場条件：普通	砕土3回掛けを標準とする。
		圃場条件：不良	
III その他工事(耕起等一部施工ほか)		各支所で設定	堆肥散布、カッティングドレーン、有材心破等



財団法人 北海道農業開発公社

本所 〒060-0005 札幌市中央区北5条西6丁目1番23
TEL(代表)011-241-7551 FAX011-271-3776
ホームページ <http://www.adhokkaido.or.jp>

詳しくは農協または各支所へお問い合わせください。

- 道央支所 〒068-0025 岩見沢市5条西5丁目2番地1 空知農業会館
TEL 0126-23-2178 FAX 0126-23-4260
- 道南支所 〒040-0073 函館市宮前町33番13号 道南農業会館
TEL 0138-44-5600 FAX 0138-44-5615
- 日胆支所 〒053-0021 苫小牧市若草町5丁目5番3号 日胆農業会館
TEL 0144-32-8171 FAX 0144-32-3215
- 十勝支所 〒080-0013 帯広市西3条南7丁目14番地 農協連ビル
TEL 0155-24-0254 FAX 0155-24-0261

- 釧路支所 〒085-0018 釧路市黒金町12丁目10番地 釧路農業会館
TEL 0154-22-1538 FAX 0154-25-4798
- 根室支所 〒086-1006 標津郡中標津町東6条南1丁目2番地 根室農業会館
TEL 01537-2-3296 FAX 01537-3-2080
- 北見支所 〒090-8650 北見市とん田東町617番地 北見農業会館
TEL 0157-25-2826 FAX 0157-25-9188
- 上川支所 〒070-0030 旭川市宮下通14丁目右1号 上川農業会館
TEL 0166-25-2613 FAX 0166-26-3464
- 道北支所 〒097-0001 稚内市末広4丁目2番31号 宗谷農業会館
TEL 0162-33-3321 FAX 0162-33-7339